

日知録訓注尚書篇（二）

野間 文史

凡例

- 一 本稿は顧炎武『日知録』卷二（尚書篇）の訓注である。
- 二 底本は黃汝成『日知録集釈』（光緒崇文書局開雕本・世界書局排印本）であるが、黃氏「集釈」は省いた。
- 三 本文には章ごとの通し番号（01・02……）をつけた。一章は原文・訓読文・注釈（①・②……）、そして「補説」の部分から成る。
- 四 本文は『原抄本日知録』（文史哲出版社 一九七〇年再版本）や原拠によって校訂（\*印）する場合がある。また諱字は元字に復した。
- 五 原注は「」によって区別している。
- 六 原文の分段以外にも、読解の便のため、私見によって本文を分断する場合がある。

目次

01	帝王名號	01	九族	03	舜典
04	惠迪吉從逆凶	05	懋遷有無化居	06	三江
07	錫土姓（以上前集）	08	厥弟五人	09	惟彼陶唐有比冀方
10	胤征	11	惟元祀十有二月	12	西伯戡黎
13	少師	14	殷紂之所以亡	15	武王伐紂
16	泰誓	17	百姓有過在予一人	18	王朝步自周
19	大天王季	20	彝倫	21	龜從筮逆
22	周公居東	23	微子之命	24	酒誥
25	召誥	26	元子（以上本集）	27	其稽我古人之德
28	節性	29	汝其敬識百辟享	30	惟爾王家我適
31	王來自奄	32	建官惟百	33	司空
34	顧命	35	矯虔	36	罔中于信以覆詛盟
37	文侯之命	38	秦誓	39	古文尚書
40	書序	41	豐熙偽尚書		

08 厥弟五人

夏商之世、天子之子、其封國而爲公侯者、不見於經。以太康之尸位、而有「厥弟五人」、使其並建茅土爲國屏翰、羿何至篡夏哉。富辰言「周公弔二叔之不成、故封建親戚以蕃屏周」。【杜氏解曰「弔傷也。戚同也。周公傷夏殷之叔世、疏其親戚、以至滅亡、故廣封其兄弟」。】而少康封其庶子於會稽、以奉守禹祀二十餘世、至於越之句踐、卒霸諸侯、有禹之遺烈、夫亦監於太康孤立之禍而然與。若乃孔子所謂「大道既隱、天下爲家、各親其親、各子其子」者、亦從此而可知之矣。

夏商の世には、天子の子の、其の國を封ぜられて公侯と爲る者、經に見えず。太康の位を尸どり①、而して「厥の弟五人」有るを以て、其の茅土を並び建てて國の屏翰と爲すことをせしむれば、羿②「何ぞ夏を篡ふに至らんや。富辰言ふ③」「周公は二叔の戚じからざるを用み、故に親戚を封建して以て周に蕃屏たらしむ」と。【杜氏解して曰はく「弔は傷なり。戚は同なり。周公は夏殷の叔世に、其の親戚を疏んじ、以て滅亡に至るを傷む、故に廣く其の兄弟を封ず」と。】而して少康は其の庶子を會稽に封じ、以て禹の祀を奉守すること二十餘世、越の句踐に至り、卒に諸侯に霸たりて④、禹の遺烈を有つは、夫れ亦た太康孤立の禍に監みて然せるか。乃ち孔子⑤の謂はゆる「大道既に隱れ、天下を家と爲し、各おの其の親を親とし、各おの其の子を子とす」るが若き者も、亦た此に従りて之れを知るべし。

①太康之尸位——（五子之歌）の（書序）には「太康失邦、昆弟五人、須于洛汭、作五子之歌」とあり、その本文前半は以下の通

りである。

太康尸位以逸豫、滅厥德。黎民咸貳、乃盤游無度。毘于有洛之表、十旬弗反。有窮后羿、因民弗忍、距于河。厥弟五人、御其母以從、僂于洛之汭。五子咸怨、述大禹之戒以作歌（太康位を尸どりて以て逸豫し、厥の德を滅し、黎民咸な貳し、乃ち盤しみ遊びて度無し。有洛の表に毘し、十旬反らず。有窮の後の羿、民の忍びざるに因り、河に距む。厥の弟五人、其の母に御りて以て從ひ、洛の汭に僂つ。五子咸な怨み、大禹の戒を述べて以て歌を作る）。

②羿——羿については、『左傳』襄公四年の条に、晋の魏絳が晋悼公に夏の故事を語った言葉の中にも登場し、そこでは（五子之歌）とは別の詳しい伝承が記述されている。なお「」内は注を示し、ここは杜預注である（以下同様）。

昔有夏之方衰也、后羿自鉅遷于窮石、因夏民以代夏政。恃其射也、不修民事、而淫于原獸、棄武羅、伯因、熊髡、尅圍、而用寒浞。寒浞、伯明氏之讒子弟也、伯明后寒、棄之。夷羿收之、信而使之、以爲己相。浞行媚于内而施賂于外、愚弄其民而虞羿于田。樹之詐慝、以取其國家、外内咸服。羿猶不悛。將歸自田、家衆殺而亨之、以食其子、其子不忍食諸、死于窮門。靡奔有鬲氏。「靡夏遺臣事羿者。有鬲國名、今平原鬲縣。」浞因羿室、生澆及豷、恃其讒慝詐僞而不德于民、使澆用師、滅斟灌及斟尋氏。「二國夏同姓諸侯、仲康之子、后相所依。樂安壽光縣東南有灌亭。北海平壽縣東南有斟亭。」處澆于過、處豷于戈。「過・戈皆國名。東萊掖縣北有過鄉。戈在宋鄭之間。」靡自有鬲氏、收二國之燼、以滅浞而立少康。「少

康夏后相之子。少康滅澆于過、后杼滅豷于戈、(后杼少康子。有窮由是遂亡、失人故也。〔泥因羿室、故不改有窮之號。〕

夏の衰えに乗じて政權を奪った后羿であつたが、伯明氏から亡命してきた寒泥を重用して田獵にふけたため、有窮も寒泥に奪われることとなる。しかし寒泥もまた民に恩徳を施さず、その子の澆と豷に斟灌と斟尋氏を滅亡させたが、二国の残存勢力を結集した夏の大臣の靡が寒泥を殺して、夏の子孫たる少康を擁立し、澆と豷を滅ぼしたといふ顛末である。

そして『左傳』哀公元年の条には、この後半部分の更に詳細な顛末が記載されている。吳王夫差を諫めた伍員(伍子胥)の言葉の中に見えるものがそれである。

臣聞之「樹德莫如滋、去疾莫如盡」。昔有過澆殺斟灌以伐斟鄩、滅夏后相、后緡方娠、逃出自竇、歸于有仍、生少康焉。爲仍牧正、棼澆能戒之。澆使椒求之、逃奔有虞、爲之庖正、以除其害。虞思於是妻之以二姚、而邑諸綸、有田一成、有衆一旅。能布其德、而兆其謀、以收夏衆、撫其官職。使女艾諜澆、使季杼誘豷。遂滅過、戈、復禹之績、祀夏配天、不失舊物。

これによれば、斟灌と斟尋氏は夏后相の亡命先であり、少康はその遺児であることが分かる。ちなみに次条「**09** 惟彼陶唐有此冀方」は、右の『左傳』の二条、魏絳と伍員の語る史実に基づいた議論である。

③富辰——『左傳』僖公二十四年の条に、富辰が周初の同族封建の状況を回顧して以下のように述べている。本条の顧氏と同様、同族の結束を強調する主張である。

臣聞之、大上以德撫民、其次親親、以相及也。昔周公弔二叔之不咸、故封建親戚、以蕃屏周。〔弔傷也。咸同也。周公傷夏殷之叔世、疏其親戚、以至滅亡、故廣封其兄弟。〕管・蔡・鄒・霍・魯・衛・毛・聃・邴・雍・曹・滕・畢・原・鄆・郇、文之昭也。邢・晉・應・韓、武之穆也。凡・蔣・邢・茅・胙・祭、周公之胤也。召穆公思周德之不類、故糾合宗族于成周而作詩、曰「常棣之華、鄂不韡韡。凡今之人、莫如兄弟」。其四章曰「兄弟閱于牆、外禦其侮」。如是、則兄弟雖有小忿、不廢懿親。

④少康封其庶子於會稽——『史記』越王句踐世家に以下のような記述が見える。

越王句踐、其先禹之苗裔、而夏后帝少康之庶子也。封於會稽、以奉守禹之祀。文身斷髮、披草萊而邑焉。後二十餘世、至於允常。允常之時、與吳王闔廬戰而相怨伐。允常卒、子句踐立、是爲越王。

禹——啓——太康

中康——相——少康……………允常——句踐(二十餘世)

また『史記』吳太伯世家は、注②所引『左傳』哀公元年の記事に基づいたもので、吳王夫差を諫める伍員の言葉を収録している。

⑤孔子——『禮記』禮運篇による。いわゆる「大同説話」である。

孔子曰、大道之行也、與三代之英、丘未之逮也、而有志焉。大道之行也、天下爲公。選賢與能、講信修睦、故人不獨親其親、不獨子其子、使老有所終、壯有所用、幼有所長、矜

寡孤獨廢疾者、皆有所養。男有分、女有歸。貨惡其棄於地也、不必藏於己。力惡其不出於身也、不必爲己。是故謀閉而不興、盜竊亂賊而不作、故外戶而不閉、是謂大同。今大道既隱、天下爲家、各親其親、各子其子、貨力爲己、大人世及以爲禮。城郭溝池以爲固、禮義以爲紀。以正君臣、以篤父子、以睦兄弟、以和夫婦、以設制度、以立田里、以賢勇知、以功爲己。故謀用是作、而兵由此起。

09 惟彼陶唐有此冀方①

堯・舜・禹皆都河北、故曰「冀方」。至太康始失河北、而五子「御其母以從之」、於是僑國河南。再傳至相、卒爲促所滅。古之天子失其故都、未有能國者也。周失豐鎬、而平王以東。晉失維陽、宋失開封、而元帝・高宗遷於江左、遂以不振。惟殷之五遷、圮於河而非敵人之窺伺、則勢不同爾。唐自玄宗以後、天子屢嘗出狩、乃未幾而復國者、以不棄長安也。故子儀回鑾之表、代宗垂泣、宗澤還京之奏、忠義歸心。嗚呼、幸而澆之縱欲、不爲民心所附、少康乃得以一旅之衆而誅之爾。後之人主不幸失其都邑、而爲興復之計者、其念之哉。夏之都本在安邑。太康畋於洛表、而羿距於河、則冀方之地、入於羿矣。惟河之東與南、爲夏所有。至后相失國、依於二斟、於是使僥用師殺斟灌、【在今壽光縣。】以伐斟鄩、【在今濰縣。】而相遂滅、【左傳哀元年】乃處僥於過、【今掖縣】以制東方、處豷於戈、【杜氏解「在宋鄭之間。】以控南國。【襄四年】其時靡奔有鬲、【今在德平縣。】在河之東、少康奔有虞、【今虞城縣】在河之南、而自河以內無不安於亂賊者矣。合魏絳・伍員二人之言、可以觀當日之形勢。而少康之所以布

德兆謀者、亦難乎其爲力矣。【竹書謂「太康元年、即位居斟鄩」、非也。】古之天子常居冀州、後人因之、遂以「冀州」爲中國之號。楚辭九歌「覽冀州兮有餘」、淮南子「女媧氏殺黑龍以濟冀州」、路史云「中國總謂之冀州」、穀梁傳曰「桓五年」「鄭同姓之國也在冀州」。【正義曰「冀州者天下之中州、唐虞・夏・殷皆都焉。以鄭近王畿、故舉冀州以爲說。」】

\*原拠により「位」字を補う。

堯・舜・禹は皆な河北に都す、故に「冀方」と曰ふ。太康始めて河北を失ひ、而して五子「其の母に御りて以て之れに従」ふに至り、是に於て僑かりすまひして河南に國す。再傳して相に至り、卒に促の滅す所と爲る②。

古の天子其の故都を失へば、未だ能く國する者有らざるなり。周は豐鎬を失ひて、平王以て東す③。晉は維陽を失ひ、宋は開封を失ひて、元帝・高宗は江左に遷り、遂に以て振はず。惟だ殷の五遷し④、河に圮れて而も敵人の窺伺するに非ざるものは、則ち勢同じからざるのみ。唐は玄宗より以後、天子屢しば嘗て出でて狩するも、乃ち未だ幾ばくならずして國を復するは、長安を棄てざるを以てなり。故に子儀の回鑾の表に⑤、代宗垂泣し、宗澤の還京の奏に⑥、忠義心に歸す。嗚呼、幸にして澆の欲を縱、ままするや、民心の附する所と爲らず、少康乃ち一旅の衆を以てして之れを誅するを得るのみ。後の人主不幸にして其の都邑を失ひ、而も興復の計を爲さんとする者は、其れ之れを念はんかな。

夏の都は本と安邑に在り。太康洛表に畋して、羿河に距げば、則ち冀方の地は、羿に入りたり。惟だ河の東と南とのみ、夏の有する所と爲る。后相の國を失ふに至り、二斟に依り、是に於て僥を

して師を用ひて斟灌に殺さしめ、「今の壽光縣に在り。」以て斟鄩を伐ちて、「今の濰縣に在り。」相は遂に滅び、「左傳哀元年なり。」乃ち僂を過に處き、「今の掖縣なり。」以て東方を制し、翟を戈に處き、「杜氏の解に「宋鄭の間に在り」といふ。」以て南國を控ふ。「襄四年なり。」其の時、靡は有鬲に奔り、「今は德平縣に在り。」河の東に在り、少康は有虞に奔り、「今の虞城縣なり。」河の南に在りて、河より以内に亂賊に安んぜざる者無かりき。魏絳・伍員(⑦)二人の言を合すれば、以て當日の形勢を觀るべし。而るに少康の徳を布き兆謀する所以の者は、亦た難きかな其の力を爲すこと。「竹書(⑧)に「太康元年、位に即きて斟鄩に居る」と謂ふは、非なり。」

古の天子は常に冀州に居り、後人之れに因れば、遂に「冀州」を以て中國の號と爲す。楚辭九歌(⑨)の「冀州を覽るに餘有り」、淮南子(⑩)の「女媧氏は黒龍を殺して以て冀州を濟す」、路史(⑪)に云ふ「中國總じて之れを冀州と謂ふ」、穀梁傳(⑫)に曰はく「桓五年、「鄭は同姓の國なり。冀州に在り」と。「正義に曰はく「冀州は天下の中州、唐虞・夏・殷は皆な焉に都す。鄭は王畿に近きを以て、故に冀州を擧げて以て説と爲す。」

① 惟彼陶唐有此冀方——(五子之歌)の一節。

其三日、惟彼陶唐有此冀方。(其の三に曰はく、惟れ彼の陶唐は此の冀方を有つ。)(陶唐、帝堯帝都。冀州、統天下四方。)

② 太康始失河北——前条「**08** 厥弟五人」注①・②参照。

③ 周失豊鎬——『史記』周本紀・太史公讚。

於是諸侯乃即申侯而共立故幽王太子宜臼、是爲平王、以奉周祀。平王立、東遷于雒邑、辟戎寇。平王之時、周室衰微、諸

侯疆并弱、齊・楚・秦・晉始大、政由方伯。

太史公曰、學者皆稱周伐紂、居洛邑、綜其實不然。武王營之、成王使召公卜居、居九鼎焉、而周復都豊鎬。至犬戎敗幽王、周乃東徙于洛邑。所謂周公葬於畢、畢在鎬東南杜中。秦滅周、漢興九十有餘載、天子將封泰山、東巡狩至河南、求周苗裔、封其後嘉三十里地、號曰周子南君、比列侯、以奉其先祭祀。

④ 惟殷之五遷——(盤庚)序。

盤庚五遷、將治亳殷。「自湯至盤庚、凡五遷都。盤庚治亳殷。」民咨胥怨、「胥相也。民不欲徙、乃咨嗟憂愁、相與怨上。」作盤庚三篇

また前条「**08** 厥弟五人」注①参照。

⑤ 子儀回鑾之表、代宗垂泣——『舊唐書』卷一百二十郭子儀傳。

自西蕃入寇、車駕東幸、天下皆咎程元振、諫官屢論之。元振懼、又以子儀復立功、不欲天子還京、勸帝且都洛陽以避蕃寇、代宗然之、下詔有日。子儀聞之、因兵部侍郎張重光宣慰迴、附章論奏曰「……願時邁順動、迴鑾上都、再造邦家、唯新庶政、奉宗廟以修薦享、謁陵寢以崇孝思、臣雖隕越、死無所恨。」

代宗省表、垂泣謂左右曰「子儀用心、眞社稷臣也。可亟還京師。」十一月、車駕自陝還宮、子儀伏地請罪、帝駐車勞之曰「朕用卿不早、故及於此。」乃賜鐵券、圖形凌煙閣。

⑥ 宗澤還京之奏——『宋史』卷三百六十三許翰傳。

高宗即位、用李綱薦、召復延康殿學士。既至、拜尚書右丞兼權門下侍郎。時建炎大變之後、河北山東大盜李成、孔彥舟等、聚衆各數十萬、皆以勤王爲名、願得張所爲帥。所爲御史、

嘗論黃潛善姦邪不可用、由此得罪。李綱爲相、乃以所爲河北等路招撫使、率成等衆渡河、號召諸路、爲興復計。潛善力沮之。宗澤論車駕不宜南幸、宜還京師、且詆潛善等。潛善等請罷澤、翰極論以爲不可。李綱罷、翰言「綱忠義英發、捨之無以佐中興、今罷綱、臣留無益。」力求去、高宗未許。時潛善奏誅陳東、翰謂所親曰「吾與東、皆爭李綱者。東歿東市、吾在廟堂可乎。」求去益力、章八上、以資政殿大學士提舉洞霄宮。復以言者落職。……

景衡得程頤之學、志慮忠純、議論不與時俯仰。建炎初、李綱議幸南陽、宗澤請還京、景衡乃請幸建康。黃潛善等素惡其異己、暨車駕駐揚州、怵於傳聞、不得已下還京之詔、遂借渡江之議罪之、斥逐而死。既沒、高宗思之曰「朕自即位以來、執政忠直、遇事敢言、惟許景衡。」詔賜景衡家溫州官舍一區。

⑦魏絳・伍員——前条「08 厥第五人」注②参照。

⑧竹書——『竹書紀年』は晉代に発見された当時の新出土資料、いわゆる「汲冢書」のひとつであるが、今本二卷本（漢魏叢書・四部叢刊等）は後人の増改を経たものである。その後、清末の諸儒によつて古書所引のものが輯逸されるが、これを前者と区別して『古本竹書紀年』と呼ぶ。もちろん顧氏のいう『竹書紀年』とは、『今本竹書紀年』である。

帝太康 元年、癸未、帝即位、居斟鄩。改于洛表。羿入居斟鄩。

ちなみに王國維『今本竹書紀年疏證』には以下のように見える。

帝太康 元年、癸未、帝即位、居斟尋。（水經巨洋水注、漢書地理志注、史記夏本紀正義引臣瓚曰「汲郡古文、太康居斟尋」。）

改于洛表。（偽書五子之歌「改于有洛之表」。）

羿入居斟尋。（水經巨洋水注、漢書地理志注、史記夏本紀正義引臣瓚曰「汲冢古文、太康居斟尋、羿亦居之」。）

⑨楚辭九歌——『楚辭』九歌「覽冀州兮有餘、橫四海兮焉窮。（冀州を覽<sup>み</sup>て餘有り、四海に横たはつて焉<sup>なん</sup>窮まらん。）」

⑩淮南子——『淮南子』覽命訓に見える。

往古之時、四極廢、九州裂、天不兼覆、地不周載、火熾炎而不滅、水浩洋而不息、猛獸食顛民、鷙鳥攫老弱。於是女媧鍊五色石以補蒼天、斷鼈足以立四極、殺黑龍以濟冀州、積蘆灰以止涇水。蒼天補、四極正、涇水涸、冀州平、狡蟲死、顛民生。

⑪路史——『路史』後記第二卷・大吳紀下・女皇氏の羅萃注の文章。

⑫穀梁傳——『穀梁傳』桓公五年の条に「秋、蔡人・衛人・陳人從王伐鄭。舉從者之辭也。其舉從者之辭何也、爲天王諱伐鄭也。鄭、同姓之國也。在乎冀州。於是不服、爲天子病矣」とあり、その楊士勛疏は以下の通り。

釋曰、徐邈云「新鄭屬冀州」。案爾雅「兩河間曰冀州」。新鄭在河南、不得屬冀州、是徐之妄也。麋信云「鄭在冀州者、韓哀侯滅鄭、遂都之、韓故晉也。傳以當時言之、遂云冀州」。然則王伐鄭之時、本未有韓國、何得將後代之事、以爲周世之名。若以韓侯從冀州都鄭、則曰冀州、大伯從雍州適吳、豈得謂吳爲雍州也。是麋信之謬矣。蓋「冀州」者天下之中州、自唐虞及夏殷皆都焉、則冀州是天子之常居。以鄭近王畿、故舉冀州以爲說。故鄒衍著書云「九州之内、名曰赤縣」。赤縣之畿、從冀州而起、故後王雖不都冀州、

亦得以冀州言之。

10 胤征

羲和尸官、慢天也。葛伯不祀、忘祖也。至於動六師之誅、與鄰國之伐、古之聖人、其敬天尊祖也至矣。故王制天子巡守、其削緦諸侯、必先於不敬不孝。

\*集釈本「亡」字に作る。「忘祖」が正しい。

羲和の官を尸<sup>つかさど</sup>るは①、天を慢<sup>あなど</sup>るなり。葛伯の祀<sup>まつ</sup>らざるは②、祖を忘るるなり③。六師を動かすの誅、鄰國を興すの伐に至りては、古の聖人、其の天を敬ひ祖を尊ぶや至れり。故に王制④にては天子の巡守するや、其の諸侯を削<sup>きざ</sup>つ緦<sup>きざ</sup>するに、必ず不敬・不孝を先にす。

①羲和尸官——〈胤征〉篇。

惟仲康肇位四海。胤侯命掌六師。羲和廢厥職、酒荒于厥邑、胤後承王命徂征、告于衆曰「嗟予有衆、聖有謨訓、明徵定保。先王克謹天戒、臣人克有常憲。百官修輔、厥後惟明明。每歲孟春、道人以木鐸徇于路。官師相規、工執藝事以諫。其或不恭、邦有常刑。惟時羲和、顛覆厥德、沈亂于酒、畔官離次、偪擾天紀、遐棄厥司。乃季秋月朔、辰弗集于房。瞽奏鼓、鼈夫馳、庶人走。羲和尸厥官、罔聞知。昏迷于天象、以干先王之誅。政典曰『先時者殺無赦、不及時者殺無赦』。今予以爾有衆、奉將天罰。爾衆士同力王室、尚弼予、欽承天子威命、

火炎昆岡、玉石俱焚、天吏逸德、烈于猛火。殲厥渠魁、脅從罔治、舊染汚俗、咸與惟新。嗚呼。威克厥愛允濟、愛克厥威允罔功。其爾衆士懋戒哉。」

②葛伯不祀——〈胤征〉篇。

湯征諸侯、〔爲夏方伯、得專征伐。〕葛伯不祀、湯始征之。〔葛國、伯爵也。廢其土地山川及宗廟神祇、皆不祀。湯始伐之、伐始於葛。〕

③忘祖——參考：『左傳』昭公十五年の條に、周の景王が晉の籍談を批評した言葉の中に見える。

王曰「叔氏、而忘諸乎。叔父唐叔、成王之母弟也、其反無分乎。密須之鼓與其大路、文所以大蒐也。闕鞶之甲、武所以克商也。唐叔受之、以處參虛、匡有戎狄。其後襄之二路、鍼鉞・鉅鬯、彤弓・虎賁、文公受之、以有南陽之田、撫征東夏、非分而何。夫有助而不廢、有績而載、奉之以土田、撫之以彝器、旌之以車服、明之以文章、子孫不忘、所謂福也。福祚之不登、叔父焉在。且昔而高祖孫伯鬻司晉之典籍、以爲大政、故曰籍氏。及辛有之二子董之晉、於是乎有董史。女、司典之後也、何故忘之」。籍談不能對。賁出、王曰「籍父其無後乎。數典而忘其祖〔籍父は其れ後無からんか。典を數へて其の祖を忘る〕」。

④王制——『禮記』王制篇。

天子五年一巡守。歲二月、東巡守至于岱宗、柴而望祀山川。覲諸侯。問百年者就見之。命大師陳詩以觀民風、命市納賈以觀民之所好惡、志淫好僻。命典禮考時月、定日、同律、禮樂制度衣服正之。山川神只、有不舉者、爲不敬。不敬者、君削以地。宗廟、有不順者爲不孝。不孝者、君緦以爵。變禮易樂

者、爲不從。不從者、君流。革制度衣服者、爲畔。畔者、君討。有功德於民者、加地進律。五月、南巡守至于南岳、如東巡守之禮。八月、西巡守至于西岳、如南巡守之禮。十有一月、北巡守至于北岳、如西巡守之禮。歸、假于祖禰、用特。

11 惟元祀十有二月

「惟元祀十有二月乙丑」、「元祀」者太甲之元年、「十有二月」者建丑之月、蓋湯之崩、必以前年之十二月也。「殷練而耐」。伊尹祠於先王、奉嗣王祗見厥祖、耐湯於廟也。【非朔者、耐廟無定日。】先君耐廟、而後嗣子即位。故成之爲王、而「伊尹乃明言烈祖之成德、以訓於王」也。若自桐歸亳、以「三祀之十二月」者、則適當其時、而非有所取爾。

即位者即先君之位也。未耐則事死如生、位猶先君之位也。故耐廟而後嗣子即位。「殷練而耐」、即位必在期年之後。「周卒哭而耐」、故踰年斯即位矣。【如魯成公以八月薨、十二月葬、襄公以明年正月即位。】有不待葬而即位、如魯之文公・成公者、其禮之未失乎。

三年喪畢而後踐天子位、舜也、禹也。練而耐、耐而即位、殷也。踰年正月即位、周也。世變愈下、而柩前即位、爲後代之通禮矣。

\* 1 世界書局本「子」字に誤る。

\* 2 世界書局本「未」字に誤る。

「惟れ元祀の十有二月、乙丑」①の、「元祀」とは太甲の元年、「十有二月」とは建丑の月にして、蓋し湯の崩ずるは、必ず前年の十二月を以てせしならん。「殷は練して耐す」②。「伊尹先王を祠り、

嗣王を奉じて祗しみ厥の祖に見えしむ」とは、湯を廟に耐するなり。【朔に非ざるは、廟に耐する定日無ければなり。】先君廟に耐せられて、而る後に嗣子位に即く。故に成の王と爲り、而して「伊尹乃先烈祖の成徳を明言して、以て王に訓ふる」なり。桐より亳に歸りて③、「三祀の十二月」を以てするが若きは、則ち適たま其の時に當たれるにて、取る所有るに非ざるのみ。

位に即くとは先君の位に即くなり。未だ耐せざるときは則ち死に事ふるること生の如くし④、位は猶ほ先君の位なり。故に廟に耐して而る後に嗣子位に即く。「殷は練して耐するものなれば、即位は必ず期年の後に在り。「周は卒哭して耐す」⑤、故に年を踰えて斯ち即位す。【魯の成公⑥の八月を以て葬じ、十二月に葬むり、襄公の明年正月を以て即位するが如し。】葬を待たずして即位する有るに、魯の文公⑦・成公の如き者は、其の禮を之れ失ふ未きものなるか。三年の喪畢はりて而る後に天子の位を踐むは、舜なり、禹なり。練して耐し、耐して即位するは、殷なり。年を踰えて正月に即位するは、周なり。世變すること愈いよ下りて、柩前に即位すること⑧、後代の通禮と爲れり。

① 惟元祀十有二月乙丑——《伊訓》篇の序とその冒頭部分は以下の通り。

成湯既没。太甲元年、「太甲、太丁子、湯孫也。太丁未立而卒。及湯没而太甲立、稱元年。」伊尹作伊訓・肆命・徂后〔凡三篇其二七〕

惟元祀、十有二月、乙丑、伊尹祠于先王、奉嗣王祗見厥祖。侯甸群后成在。百官總己以聽冢宰。伊尹乃明言烈祖之成徳、



以訓于王、曰「嗚呼。古有夏先后、方懋厥德、罔有天災。山川鬼神、亦莫不寧、暨鳥獸魚鱉咸若。于其子孫弗率、皇天降災、假手于我有命。造攻自鳴條、朕哉自亳。惟我商王、布昭聖武、代虐以寬、兆民允懷。」

② 殷練而耐——『禮記』檀弓下篇「殷練而耐、周卒哭而耐。孔子善殷」を指す。「練」はねりぎぬの意。三年の喪において、一周年に小祥の祭りをする際、練の中衣を着て練冠をかぶることに由来する。また「耐」は廟に合祀すること。

③ 自桐歸亳——『太甲』篇の序と『太甲』中篇は以下の通り。  
太甲既立不明。「不用伊尹之訓、不明居喪之禮。」伊尹放諸桐。「湯葬地也。不知朝政、故曰放。」三年復歸于亳、思庸、「念常道。」伊尹作太甲三篇。

惟三祀、十有二月、朔、「湯以元年十一月崩、至此二十六日、三年服闋。」伊尹以冕服奉嗣王、歸于亳。「冕冠也。踰月即吉服。」  
④ 事死如生——参考：『禮記』祭義篇「文王之祭也。事死者如事生、思死者如不欲生、忌日必哀、稱諱如見親」、〈中庸〉篇「踐其位、行其禮、奏其樂、敬其所尊、愛其所親、事死如事生、事亡如事存、孝之至也」、また『左傳』哀公十五年傳「上介芋尹蓋對曰、且臣聞之曰、事死如事生、禮也。」

⑤ 周卒哭而耐——注②参照。

⑥ 魯成公——魯の成公の薨・葬、襄公の即位に関する『春秋』経文は次の通りである。  
八月、邾子來朝。筑鹿圃。  
己丑、公薨于路寢。【傳】己丑、公薨于路寢、言道也。  
十有二月、仲孫蔑會晉侯宋公衛侯邾子齊崔杼、同盟于虛打。

丁未、葬我君成公。【傳】丁未、葬我君成公、書順也。  
元年、春、王正月、公即位。  
八月己丑より十二月丁未まで139日である。  
⑦ 魯文公——魯の文公の薨・葬、宣公の即位に関する『春秋』経文は次の通りである。

十有八年、春、王二月、丁丑、公薨于臺下。  
六月、癸酉、葬我君文公。  
元年、春、王正月、公即位。  
二月丁丑より六月癸酉まで177日である。

⑧ 柩前即位——参考：『後漢書』禮儀志下・大喪の条。  
三公奏尚書願命、太子即日即天子位于柩前、請太子即皇帝位、皇后爲皇太后。奏可。羣臣皆出、吉服入會如儀。太尉升自阼階、當柩御坐北面稽首、讀策畢、以傳國玉璽綬東面跪授皇太子、即皇帝位。中黃門掌兵以玉具、隨侯珠、斬蛇寶劍授太尉、告令羣臣、羣臣皆伏稱萬歲。或大赦天下。遣使者詔開城門、宮門、罷屯衛兵。羣臣百官罷、入成喪服如禮。兵官戎。三公、太常如禮。

12 西伯戡黎  
以關中并天下者、必先於得河東。秦取三晉、而後滅燕・齊。符氏取晉陽、而後滅燕。宇文氏取晉陽、而後滅齊。故西伯戡黎、而殷人恐矣。

關中を以て天下を并せんとする者は、必ず河東を得るを先にす。

秦は三晉を取りて、而る後に燕・齊を滅す。符氏は晉陽を取りて、而る後に燕を滅す。宇文氏は晉陽を取りて、而る後に齊を滅す。故に西伯の黎に戡ちて、而ち殷人は恐れたり(①)。

①西伯戡黎——〔西伯戡黎〕篇。

西伯既戡黎、祖伊恐、奔告于王。曰、天子。天既訖我殷命、格人元龜、罔敢知吉。……

13 少師

古之官有職異而名同者。太師・少師是也。比干之爲少師、周官所謂三孤也。論語之少師陽、則樂官之佐、而周禮謂之小師者也。故史記言「紂之將亡、其太師疵・少師彊抱其樂器奔周」。而後儒之傳、誤以爲微子也。【周本紀○漢書古今人表亦有太師疵・少師彊。】

古の官に職は異なれども名は同じき者有り。太師・少師是れなり。比干の少師と爲るは(①)、周官(②)の謂はゆる三孤なり。論語の少師陽は(③)、則ち樂官の佐にして、周禮(④)にては之れを小師と謂ふ者なり。故に史記(⑤)に言ふ「紂の將に亡びんとするや、其の太師疵・少師彊は其の樂器を抱きて周に奔る」と。而るに後儒の傳するや、誤りて以て微子と爲すなり。【周本紀。○漢書古今人表(⑥)にも亦た太師疵・少師彊有り。】

①比干之爲少師——〔微子〕篇。

微子若曰、父師・少師〔父師、太師、三公箕子也。少師、孤卿、

比干。微子以紂距諫、知其必亡順其事而言之、殷其弗或亂正四方。

②周官所謂三孤也——〔周禮〕中には「孤卿」として見える。

③論語之少師陽——〔論語〕微子篇。

大師摯適齊、亞飯干適楚、三飯繚適蔡、四飯缺適秦、鼓方叔入于河、播鼗武入于漢、少師陽・擊磬襄入于海。〔孔曰、魯哀公時、禮壞樂崩、樂人皆去。陽・襄皆名也。〕

④周禮謂之小師者也——〔周禮〕春官・序官。

大師。下大夫二人。小師、上士四人。瞽矇、上瞽四十人、中瞽百人、下瞽百有六十人。〔凡樂之歌、必使瞽矇爲焉、命其賢知者、以爲大師・小師。〕

⑤史記——〔史記〕周本紀。

居二年、聞紂昏亂暴虐滋甚、殺王子比干、囚箕子。太師疵・少師彊抱其樂器而奔周。

⑥漢書古今人表——〔漢書〕古今人表の〔上中・仁人〕の項目に「太師疵・少師強」の名が見える。

14 殷紂之所以亡

自古國家承平日久、法制廢弛、而上之令不能行於下、未有不亡者也。紂以不仁而亡天下、人人知之、吾謂不盡然。紂之爲君、沈湎於酒、而逞一時之威、至於剝孕斲脛、蓋齊文宣之比耳。商之衰也久矣。一變而盤庚之書、則卿大夫不從君令、再變而微子之書、則小民不畏國法。至於「攘竊神祇之犧牲、用以容、將食無災」、可謂民玩其上、而威刑不立者矣。【史記「燕王喜遺樂間書曰、紂之時、民志不入、獄囚自

出。】即以中主守之、猶不能保、而況以紂之狂酗昏虐、又「祖伊奔告」而不省乎。文宣之惡、未必滅於紂、而齊以強、高緯之惡、未必甚於文宣、而齊以亡者、文宣承神武之餘、紀綱粗立、而又有楊楨輩爲之佐、主昏於上、而政清於下也。至高緯而國法蕩然矣。故宇文得而取之。然則論紂之亡、武之興、而謂「以至仁伐至不仁」者、偏辭也、未得爲窮源之論也。

\* 1 原抄本「疆」字に作る。

\* 2 集積本「祖」字に誤る。

\* 3 原抄本「之」字に作る。

古より國家の平を承くること日久しく、法制廢弛されて、上の令下に行なはるる能はざれば、未だ亡びざる者有らざるなり。紂の不仁を以てして天下を亡ふこと、人人之れを知るも、吾は盡くは然らずと謂はん。紂の君爲るや(①)、酒に沈湎して、一時の威を逞にするも、孕「妊婦」を刳き脛を斫るに至りては、蓋し齊の文宣の比なるのみ。商の衰ふるや久しかりき。一變して盤庚の書にては、則ち卿大夫は君令に従はず、再變して微子の書にては、則ち小民は國法を畏れず。「神祇の犧牲性を攘竊し、用ひ以て容れ、將る食らふも災無き」(②)に至りては、民其上を玩びて、威刑立たざる者と謂ふべし。【史記(③)に「燕王喜樂間に書を遺りて曰は

く、紂の時、民の志入らず、獄囚自ら出づ」とあり。】即ち中主を以て之れを守るも、猶ほ保つ能はず、而るを況んや紂の狂酗昏虐を以てし、又た「祖伊の奔告」して省ざるものをや。文宣の惡は、未だ必ずしも紂より減ぜざるに、而も齊は以て強く、高緯の惡は、未だ必ずしも文宣より甚しからざるに、而も齊の以て亡びしは、文宣

神武の餘を承け、紀綱粗ば立ち、而して又た楊楨の輩の之れが佐と爲る有りて、主上に昏けれども、而も政下に清らかなればなり。高緯に至りては國法蕩然たり。故に宇文得て之れを取る。然らば則ち紂の亡ぶる、武の興るを論じて、「至仁を以て至不仁を伐つ」と謂ふは、偏辭なり、未だ窮源の論爲るを得ざるなり。

① 紂之爲君——紂の惡君ぶりを『尚書』は以下のように記す。

〔微子〕微子若曰「父師、少師、殷其弗或亂正四方。我祖底遂陳于上、我用沈酗于酒、用亂敗厥德于下。殷罔不小大、好草竊姦宄、卿士師師非度、凡有辜罪、乃罔恒獲。小民方興、相爲敵讎。今殷其淪喪、若涉大水、其無津涯。殷遂喪、越至于今」。

〔泰誓上〕惟十有三年、春、大會于孟津。王曰「……今商王受、弗敬上天、降災下民、沈緬冒色、敢行暴虐。罪人以族、官人以世。惟宮室、臺榭、陂池、侈服、以殘害于爾萬姓。焚炙忠良、劓剔孕婦。……」

〔泰誓下〕王曰「……今商王受、狎侮五常、荒怠弗敬。自絶于天、結怨于民、斲朝涉之脛、剖賢人之心。作威殺戮毒痛四海。崇信姦回、放黜師保、屏棄典刑、囚奴正士、郊社不修、宗廟不享、……」。

② 攘竊神祇之犧牲性——〔微子〕篇。

父師若曰「王子。天毒降災荒殷邦、方輿沈酗于酒。乃罔畏畏、咈其耆長舊有位人。今殷民、乃攘竊神祇之犧牲性、用以容、將食無災。降監殷民、用乂、讎斂、召敵讎不忘。罪合于一、多瘠罔詔。商今其有災、我興受其敗。商其淪喪、我罔爲臣仆。詔王子出迪、我舊云刻子、王子弗出、我乃顛隕。自靖、人自獻于先

王、我不願行逐」。

③史記——『史記』樂毅列傳。

燕王恨不用樂間、樂間既在趙、乃遣樂間書曰「紂之時、箕子不用、犯諫不怠、以冀其聽。商容不達、身祗辱焉、以冀其變。及民志不入、獄囚自出、然後二子退隱。故紂負桀暴之累、二子不失忠聖之名。何者、其憂患之盡矣。今寡人雖愚、不若紂之暴也。燕民雖亂、不若殷民之甚也。室有語、不相盡、以告鄰里。二者、寡人不為君取也。」

15 武王伐紂

武王伐商殺紂、而立其子武庚、宗廟不毀、社稷不遷、時殷未嘗亡也。所以異乎曩日者、不朝諸侯、不有天下而已。故書序言「三監及淮夷叛。周公相成王、將黜殷、作大誥」、又言「成王既黜殷命、殺武庚」。【荀子言「周公殺管叔、虛殷國」、注「虛讀爲墟。謂殺武庚、遷殷頑民於雒邑、朝歌爲墟也。」是則殷之亡其天下也、在紂之自燔、而亡其國也、在武庚之見殺。蓋武庚之存殷者猶十有餘年、使武庚不畔、則殷其不黜矣。」

武王克商、天下大定、裂土奠國、乃不以其故都封周之臣、而仍以封武庚、降在侯國、而猶守先人之故土。【蔡仲之命曰「乃致群管叔於商」。武庚未殺、猶謂之商。】武王無富天下之心、而不以叛逆之事疑其子孫、所以異乎後世之篡弑其君者、於此可見矣。及武庚既畔、乃命微子啓代殷、而必於宋焉。謂「大火之祀、商人是因」、弗遷其地也。是以知古聖王之征誅也、取天下而不取其國、誅其君弔其民、而存其先世之宗祀焉斯已矣。【高誘淮南子注曰「天子不滅國、諸侯不滅姓、古之政也。」】

武王豈不知商之臣民其不願爲周者、皆故都之人、公族世家之所萃、「流風善政」之所存、一有不靖、易爲搖動。而必以封其遺胤、蓋不以畔逆疑其子孫、而明告萬世、以取天下者無滅國之義也。故宋公朝周、則曰臣也。周人待之、則曰客也。自天下言之、則侯服于周也。自其國人言之、則以商之臣事商之君、無變於其初也。平王以下、去微子之世遠矣、而曰「孝惠娶於商」、【左氏哀二十四年傳】曰「天之棄商久矣」、【僖二十二年傳】曰「利以伐姜、不利子商」。【哀九年傳】吾是以知宋之得爲商也。【國語】「吳王夫差闕爲深溝、通於商魯之間、莊子「商太宰蕩問仁於莊子」、韓非子「子圍見孔子於商太宰」、商太宰使少庶子之市」、逸周書王會篇「堂下之左、商公·夏公立焉」。○樂記「商者五帝之遺聲也。商人識之、故謂之商」、鄭氏注曰「商宋詩也」。蓋自武庚誅而宋復封、於是商人曉然知武王·周公之心、而君臣上下、各止其所、無復有怨懟不平之意。與後世之人主、一戰取人之國、而毀其宗廟、遷其重器者異矣。【樂記曰「投殷之後於宋」、此本之呂氏春秋、乃戰國時人之妄言。以「武王下車、即封微子」、更誤。】

或曰「遷殷頑民於雒邑」何與。曰、以「頑民」爲「商俗靡靡」之民者、先儒解誤也。蓋古先王之用兵也不殺、而待人也仁。東征之役、其誅者、事主一人武庚而已、謀主一人管叔而已。下此而囚、下此而降、下此而遷。而所謂「頑民」者、皆畔逆之徒也。無連座并誅之法、而不可以復置之殷都、是不得不遷。而又原其心、不忍棄之四裔、故於雒邑。又不忍斥言其畔、故止曰「頑民」。其與乎畔而遷者、大抵皆商之世臣大族、而其不與乎畔而留於殷者、如祝佗所謂「分康叔以殷民七族、陶氏·施氏·繁氏·錡氏·樊氏·饑氏·終葵氏」是也。非盡一國而遷之也。

或曰、何以知其爲畔黨也。曰、以召公之言「讎民」知之。不畔何以

言讎。非敵百姓也。古聖王無與一國爲讎者也。

上古以來、無殺君之事也。湯之於桀也、放之而已。使紂不自焚、武王未必不以湯之待桀者待紂。紂而自焚也、此武王之不幸也。當時八百諸侯、雖並有除殘之志、然一聞其君之見殺、則天下之人亦且恫疑震駭、而不能無歸過於武王。此伯夷所以斥言其暴也。及其反商之政、封殷之後人而無利於其土地焉、天下於是知武王之兵非得已也、然後乃安於紂之亡、而不以爲周師之過。故箕子之歌、怨狡童而已、無餘恨焉。非伯夷親而箕子疏、又非武王始暴而終仁也、其時異也。

多士之書「惟三月、周公初于新邑洛、用告商王士曰、非我小國敢弋殷命」。亡國之民而號之「商王士」、新朝之主而自稱「我小國」、以天下爲公而不沒其舊日之名分。殷人以此中心悅而誠服。「卜世三十、卜年八百」、其始基之矣。

\*1 集積本には「也」字無し。

\*2 集積本「七」字に誤る。

武王 商を伐ち紂を殺すも、而も其の子の武庚を立て、宗廟は毀たず、社稷は遷さざれば、時に殷未だ嘗て亡びざるなり。曩日に異なる所以は、諸侯を朝せしめず、天下を有たざるのみ。故に書序①に「三監及び淮夷叛く。周公成王に相となり、將に殷を黜けんとして、大誥を作る」と言ひ、又た「成王既に殷の命を黜け、武庚を殺す」と言ふ。【荀子②】「周公管叔を殺し、殷國を虚にす」と言ひ、注に「虚は讀みて墟と爲す。武庚を殺し、殷の頑民を雒邑に遷し、朝歌をば墟と爲すを謂へるなり」とあり。】是れ則ち殷の其の天下を亡ふや、紂の自燔【自ら焼け死ぬ】に在りて、其の國を亡ぼすや、武庚の殺

ざるるに在り。蓋し武庚の殷を存する者猶ほ十有餘年あり。使し武庚畔かざりせば、則ち殷は其れ黜けられざらん。

武王 商に克ち、天下をば大いに定め、土を裂き國を奠むるに、乃て其の故都を以て周の臣を封ぜずして、仍ほ以て武庚を封じ、降して侯國に在らしめて、猶ほ先人の故土を守らしむ。【蔡仲之命③】に曰く「乃ち辟を管叔に商に致す」と。武庚未だ殺されざるとき、猶ほ之れを商と謂ふ。【武王には天下を富とするの心無く、而して叛逆の事を以て其の子孫を疑はず、後世の其の君を篡弒するに異なる所以の者は、此に於て見るべし。武庚の既に畔くに及びては、乃ち微子啓に命じて殷に代らしめ、而して必ず宋に於てせしむ。「大火の祀、商人是れ因る」④と謂へば、其の地を遷さざるなり。是を以て古聖王の征誅するや、天下を取れども其の國を取らず、其の君を誅し其の民を弔へども、其の先世の宗祀を焉に存して斯ち已むを知る。【高誘の淮南子注⑤】に曰く「天子は國を滅せず、諸侯は姓を滅せざるは、古の政なり」と。【武王豈に商の臣民 其の周と爲るを願はざる者は皆な故都の人にして、公族・世家の萃る所、「流風善政」⑥の存する所、一に靖んぜざる有りて、搖動を爲し易きを知らざらんや。而るに必ず以て其の遺胤を封ずるは、蓋し叛逆を以て其の子孫を疑はず、而して明らかに萬世に告ぐるに、天下を取る者に滅國の義無きを以てすればならん。故に宋公の周に朝するときは、則ち臣と曰ふなり。周人之れを待つときは、則ち客と曰ふなり。天下より之れを言へば、則ち周に侯として服するなり。其の國人より之れを言へば、則ち商の臣を以て商の君に事ふるにて、其の初めに變はること無きなり。平王より以下、微子の世を去ること遠かりしも、而も「孝惠 商に娶る」⑦と曰ひ、【左氏哀二十四年傳。】「天の商を棄つ

ること久しくなりぬ」(8)と曰ひ、【僖二十二年傳。】「以て姜を伐つに利あり、子商に利あらず」(9)と曰ふ。【哀九年傳。】「吾れ是を以て宋の商爲るを得るを知るなり。【國語(10)に「呉王夫差 闕きて深溝を爲り、商・魯の間を通ず」とあり、莊子(11)に「商の太宰蕩 仁を莊子に問ふ」とあり、韓非子(12)に「子圍 孔子を商の太宰に見えしむ」、商の太宰少庶子をして市に之かしむ」とあり、逸周書王會篇(13)に「堂下の左、商公・夏公 焉に立つ」とあり。○樂記(14)に「商は五帝の遺聲なり。商人之れを識る、故に之れを商と謂ふ」とあり、鄭氏注に曰く「商は宋詩なり」と。蓋し武庚の誅せられて而も宋復た封ぜられてより、是に於て商人は曉然として武王・周公の心を知りて、君臣上下、各おの其の所に止まり、復た怨懟不平の意有る無かりしならん。後世の主人の、一ら戦ひて人の國を取り、而して其の宗廟を毀ち、其の重器を選ず者とは異れり。【樂記(15)に「殷の後を宋に投ず」と曰ふは、此れ之れを呂氏春秋(16)に本づけるにて、乃ち戰國時人の妄言なり。「武王下車して即ち微子を封ず」と以ふは、更に誤りなり。】或は曰はく、「殷の頑民を雒邑に遷す」(17)とは何ぞや、と。曰はく、「頑民」を以て「商俗靡靡」(18)の民と爲すは、先儒の解の誤りなり。蓋し古の先王の兵を用ふるや殺さずして、人を待つや仁なり。東征の役、其の誅する者は、事主一人、武庚のみ、謀主一人、管叔のみ。此れより下は而ち囚はれ、此れより下は而ち降り、此れより下は而ち遷る。而して謂はゆる「頑民」とは、皆な畔逆の徒なり。連座并誅の法無く、而して又た以て復た之れを殷都に置くべからず、是れ遷さざるを得ず。而して又た其の心を原ぬるに、之れを四裔に乗つるに忍びず、故に雒邑に於てす。又た其の畔を斥言するに忍びず、故に止だ「頑民」と曰ふのみ。其の畔に與りて遷

さるる者は、大抵皆な商の世臣・大族にして、其の畔に與らずして殷に留まる者は、祝佗(19)の謂はゆる「康叔に分つに殷民七族、陶氏・施氏・繁氏・錡氏・樊氏・饑氏・終葵氏を以てす」の如きはれなり。一國を盡して之れを選ずに非ざるなり。

或は曰はく、何を以て其の畔黨爲るを知るや、と。曰はく、召公の「讎民」(20)と言ふを以て之れを知る、と。畔かざれば何を以て讎と言はんや。百姓を敵とするに非ざるなり。古の聖王には一國に與て讎と爲る者無きなり。

上古以來、君を殺すの事無きなり。湯の桀に於けるや、之れを放つのみ。使し紂自焚「自ら焼け死ぬ」せずんば、武王未だ必ずしも湯の桀を待つ所以の者を以て紂を待たずんばあらざるなり。紂にして自焚せしは、此れ武王の不幸なり。當時の八百諸侯には、並びに殘を除くの志有りと雖ども、然れども一たび其の君の殺さるるを聞かば、則ち天下の人も亦た且に恫疑震駭して、過ちを武王に歸する無き能はざらんとす。此れ伯夷(21)の其の暴を斥言する所以なり。其の商の政を反し、殷の後人を封じて其の土地を利する無きときに及び、天下是に於て武王の兵の已むを得るに非ざるを知るや、然る後に乃て紂の亡びしに安んじて、以て周師の過ちと爲さず。故に箕子の歌(22)は、狡童を怨むのみにて、焉に餘恨無し。伯夷の親にして箕子の疏なるに非ず、又た武王始めは暴にして終りは仁なるに非ざるなり、其の時の異なるなり。多士の書(23)に「惟れ三月、周公初めて新邑洛に于き、用て商王の士に告げて曰はく、我が小國敢へて殷の命を弋るに非ず」と。亡國の民にして之れを「商王の士」と號し、新朝の主にして自ら「我が小國」と稱し、天下を以て公と爲して其の舊日の名分を没せず。

殷人は此れを以て中心悦びて誠に服す。「世をトすること三十、年をトすること八百」(②)、其の始めは之れを基としたり。

①書序——(大誥)序・(微子之命)序。

武王崩、三監及淮夷叛。(三監、管・蔡・商、淮夷・徐奄之屬、皆叛周。)周公相成王、將黜殷、作大誥。〔相謂攝政、黜絶也。將以誅叛者之義、大誥天下。〕

成王既黜殷命、殺武庚、(一名祿父。)命微子啓代殷後、〔啓知紂必亡而奔、周命爲宋公爲湯後。〕作微子之命。〔封命之書。〕

②荀子——《儒效》篇。

大儒之效。武王崩、成王幼、周公屏成王而及武王、以屬天下、惡天下之倍周也。履天子之籍、聽天下之斷、偃然如固有之、而天下不稱貪焉。殺管叔、虛殷國、而天下不稱戾焉。〔虛讀爲墟、戾暴也。墟殷國、謂殺武庚、遷殷頑民于洛邑、朝歌爲墟也。〕

③蔡仲之命——(蔡仲之命)篇。

惟周公位冢宰、正百工。群叔流言、乃致辟管叔于商、囚蔡叔于郭鄰、以車七乘。〔致法謂誅殺、囚謂制其出入。郭鄰中國之外地名。從車七乘、言少。管・蔡、國名。〕

④大火之祀、商人是因——『左傳』襄公九年の条。

晉侯問於士弱曰「吾聞之、宋災於是乎知有天道、何故」。對曰「古之火正、或食於心、或食於味、以出內火。是故味爲鶉火、心爲大火。陶唐氏之火正閔伯居商丘、祀大火而火紀時焉。相土因之、故商主大火。商人閱其禍敗之弊、必始於火、是以日知其有天道也」。公曰「可必乎」。對曰「在道。國亂無象、不可知也」。

⑤高誘淮南子注——『淮南子』卷六・本經訓「卜其子孫以代之」の条の高誘注。

⑥流風善政——『孟子』公孫丑上篇に見える孟子の言葉。

曰「文王何可當也。由湯至於武丁、賢聖之君六七作。天下歸殷久矣。久則難變也。武丁朝諸侯有天下、猶運之掌也。紂之去武丁未久也、其故家遺俗、流風善政、猶有存者(紂の武丁を去ること未だ久しからざるなり。其の故家遺俗、流風善政、猶ほ存する者有り)。又有微子・微仲・王子比干・箕子・膠鬲、皆賢人也、相與輔相之、故久而後失之也。尺地莫非其有也、一民莫非其臣也。然而文王猶方百里起、是以難也。

⑦孝惠娶於商——『左傳』哀公二十四年の条に見える魯の宗人の魯夏の言葉。かつて魯の孝公と惠公が商(宋國)から夫人を娶つたという。

公子荊之母嬖、將以爲夫人、使宗人鬻夏獻其禮。對曰「無之」。公怒曰「女爲宗司、立夫人、國之大禮也、何故無之」。對曰「周公及武公娶於薛、孝・惠娶於商(孝公稱、惠公弗皇。商未也)、自桓以下娶於齊、此禮也則有。若以妾爲夫人、則固無其禮也」。公卒立之、而以荊爲太子、國人始惡之。

⑧天之棄商久矣——『左傳』僖公二十二年の条のいわゆる「宋襄公仁」説話中に見える宋の大司馬固の言葉。

楚人伐宋以救鄭。宋公將戰、大司馬固諫曰「天之棄商久矣、君將與之、弗可赦也已」。弗聽。冬、十一月己巳朔、宋公及楚人戰于泓。

⑨利以伐姜——『左傳』哀公九年の条に見える晉の史龜の言葉。

晉趙鞅卜救鄭、遇水適火、占諸史趙・史墨・史龜。史龜曰「是

謂沈陽、可以興兵、利以伐姜、不利子商（齊姜姓也。子商謂宋也）。伐齊則可、敵宋不吉。

⑩國語——『國語』吳語。

吳王夫差既殺申胥、不稔於歲、乃起師北征。闕爲深溝、通於商、魯之間、北屬之沂、西屬之濟、以會晉公午於黃池。

⑪莊子——『莊子』天運篇。

商大宰蕩問仁於莊子。莊子曰「虎狼、仁也。」曰「何謂也。」莊子曰「父子相親、何爲不仁。」曰「請問至仁。」

⑫韓非子——『韓非子』說林上・內儲說上。

子圍見孔子於商太宰。孔子出、子圍入。請問客。太宰曰「吾已見孔子、則視子猶蚤蝨之細者也。吾今見之於君。」子圍恐孔子貴於君也、因謂太宰曰「君已見孔子、亦將視子猶蚤蝨也。」太宰因弗復見也。

商太宰使少庶子之市、顧反而問之曰「何見於市。」對曰「無見也。」太宰曰「雖然何見也。」對曰「市南門之外甚衆牛車、僅可以行耳。」太宰因誠使者無敢告人吾所問於女、因召市吏而謂之曰「市門之外何多牛屎。」市吏甚怪太宰知之疾也、乃悚懼其所也。

⑬逸周書王會篇——『逸周書』王會篇。

成周之會、墀上張赤帟陰羽、天子南面立、繞無繁露、朝服八十物、摺筵。唐叔、荀叔、周公在左、太公望在右、皆繞、亦無繁露、朝服七十物、摺笏、旁天子而立於堂上。堂下之右、唐公、虞公南面立焉、堂下之左、殷公・夏公立焉、皆南面、繞有繁露、朝服五十物、皆摺笏。

⑭樂記——『禮記』樂記篇。

愛者、宜歌商。溫良而能斷者、宜歌齊。夫歌者、直己而陳德也。動己而天地應焉、四時和焉、星辰理焉、萬物育焉。故商者、五帝之遺聲也。商人識之、故謂之商。寬而靜、柔而正者、宜歌頌。廣大而靜、疏達而信者、宜歌大雅。恭儉而好禮者、宜歌小雅。正直而靜、廉而謙者、宜歌風。肆直而慈愛。〔此文換簡、失其次。〕寬而靜。宜在上。〔愛者宜歌商〕、宜承此下行。讀云「肆直而慈愛者宜歌商」。商宋詩也。愛或爲哀。直己而陳德者、因其德歌所宜。育生也。〕商者、五帝之遺聲也。商人識之、故謂之商。齊者三代之遺聲也、齊人識之、故謂之齊。

⑮樂記——『禮記』樂記篇。

武王克殷反商。未及下車而封黃帝之後於薊、封帝堯之後於祝、封帝舜之後於陳。下車而封夏後氏之後於杞、投殷之後於宋。封王子比干之墓、釋箕子之囚、使之行商容而復其位。

⑯呂氏春秋——『呂氏春秋』慎大覽・權勳篇。

武王勝殷、入殷、未下轡、命封黃帝之後於鑄、封帝堯之後於黎、封帝舜之後於陳。下轡、命封夏后之後於杞、立成湯之後於宋以奉桑林。武王乃恐懼、太息流涕、命周公旦進殷之遺老、而問殷之亡故、又問衆之所說、民之所欲。

⑰遷殷頑民於維維邑——『畢命』篇維に基づく。

惟周公左右先王、綏定厥家、毖殷頑民、遷于維維邑、密邇王室、式化厥訓。〔惟殷頑民、恐其叛亂、故徙於維維邑。密近王室、用化其教。〕

⑱商俗靡靡——『畢命』篇に見える言葉。

商俗靡靡、利口惟賢、餘風未殄、公其念哉（商の俗は靡靡として、利口を惟れ賢とし、餘風未だ殄さず、公其れ念はんかな）。〔村



① 祝佗所謂——『左傳』定公四年の條の、衛の祝佗(子魚)が、周初の魯・衛・晉の封建の様子を説明した言葉を指す。

子魚曰「以先王觀之、則尚德也。昔武王克商、成王定之、選建明德、以蕃屏周。故周公相王室、以尹天下、於周爲睦。

分魯公以大路・大旗、夏后氏之璜、封父之繁弱、殷民六族、條氏・徐氏・蕭氏・索氏・長勺氏・尾勺氏、使帥其宗氏、輯其分族、將其類醜、以法則周公。用即命于周。是使之職事于魯、以昭周公之明德。分之土田陪敦・祝・宗・卜・史、備物・典策、官司・彝器。因商奄之民、命以伯禽而封於少皞之虛。

分康叔以大路・少帛・綉・旃・旌・大呂、殷民七族、陶氏・施氏・繁氏・錡氏・樊氏・饑氏・終葵氏。封畛土略、自武父以南及圃田之北竟、取於有閭之土以共王職。取於相土之東都以會王之東蒐。聃季授土、陶叔授民、命以康誥而封於殷虛。皆啓以商政、疆以周索。

分唐叔以大路・密須之鼓・闕鞏・沽洗、懷姓九宗、職官五正。命以唐誥而封於夏虛、啓以夏政、疆以戎索。三者皆叔也、而有令德、故昭之以分物。

② 讎民——『尚書』召誥篇。

拜手稽首曰「予小臣、敢以王之讎民・百君子・越友民、保受王威命明德(予れ小臣は、敢へて王の民と讎<sup>な</sup>べる百君子、越<sup>お上</sup>び民を友とするを以て、王の威命明德を保受せん)。王末有成命、王亦顯。我非敢勤、惟恭奉幣、用供王、能祈天永命」。

③ 伯夷——『史記』伯夷列伝。

武王已平殷亂、天下宗周、而伯夷・叔齊恥之、義不食周粟、

隱於首陽山、采薇而食之。及餓且死、作歌。其辭曰「登彼西山兮、采其薇矣。以暴易暴兮、不知其非矣。神農・虞・夏忽焉沒兮、我安適歸矣。于嗟徂兮、命之衰矣。」遂餓死於首陽山。

④ 箕子之歌——『史記』宋微子世家に見える殷の箕子が作った歌。

於是武王乃封箕子於朝鮮而不臣也。其後箕子朝周、過故殷虛、感宮室毀壞、生禾黍、箕子傷之、欲哭則不可、欲泣爲其近婦人、乃作麥秀之詩以歌詠之。其詩曰「麥秀漸漸兮、禾黍油油。彼狡僮兮、不與我好兮。」所謂狡童者、紂也。殷民間之、皆爲流涕。

⑤ 多士之書——(多士)篇。

惟三月、周公初于新邑洛、用告商王士。王若曰「爾殷遺多士。弗吊、旻天降喪于殷、我有周佑命、將天明威、致王罰、敕殷命終于帝。肆爾多士、非我小國敢弋殷命、惟天不畀允罔固亂、弼我、我其敢求位。惟帝不畀、惟我下民秉爲、惟天明畏。我聞曰『上帝引逸』……」

⑥ ト世三十——『左傳』宣公三年の條のいわゆる「鼎の輕重を問う」故事。周の王孫滿が周の命運を述べた言葉。

楚子伐陸渾之戎、遂至於雒、觀兵于周疆。定王使王孫滿勞楚子。楚子問鼎之大小・輕重焉。對曰「在德不在鼎。昔夏之方有德也、遠方圖物、貢金九牧、鑄鼎象物、百物而爲之備、使民知神・奸。故民入川澤・山林、不逢不若。螭魅罔兩、莫能逢之。用能協于上下、以承天休。桀有昏德、鼎遷于商、載祀六百。商紂暴虐、鼎遷于周。德之休明、雖小、重也。其奸回昏亂、雖大、輕也。天祚明德、有所底止。成王定鼎于郊、卜

世三十、卜年七百、天所命也。周德雖衰、天命未改。鼎之輕重、未可問也。」

16 泰誓

商之德澤深矣、尺地莫非其有也、一民莫非其臣也。武王伐紂、乃曰「獨夫受、洪惟作威、乃汝世讎」、曰「肆予小子、誕以爾衆士、殄殲乃讎」、何至於此。紂之不善、亦止其身、乃至并其先世而讎之。豈非泰誓之文出於魏晉間人之偽撰者邪。【蔡氏曰「泰誓・武成一篇之中、似非盡出一人之口」、又引吳氏言「疑其書之晚出。或非盡當時之本文」、蓋已見及乎此。特以注家之體、未敢直言其偽耳。】

「朕夢協朕卜、襲于休祥、戎商必克」。伐君大事、而託之乎夢、其誰信之。殆即呂氏春秋載夷齊之言、謂「武王揚夢以說衆」者也。【左傳昭七年、衛史朝之言曰「筮襲于夢、武王所用也」、是當時已有此語。】孟子引書「王曰無畏。寧爾也、非敵百姓也。若崩厥角稽首」、今改之曰「罔或無畏、寧執非敵。百姓棟棟、若崩厥角」。後儒雖曲爲之說、而不可通矣。

\*光緒本「耶」字に作る。

商の德澤は深かりしかば、尺地も其の有に非ざるは莫きなり、一民も其の臣に非ざるは莫きなり(①)。武王紂を伐つに、乃て「獨夫の受、洪いに惟れ威を作し、乃ち汝の世の讎なり」と曰ひ、「肆に予れ小子、誕いに爾衆士を以て、乃の讎を殄殲せん」(②)と曰ふ。何ぞ此に至れる。紂の不善は亦た其の身に止まるも、乃て其の先世を并せて之れを讎とするに至る。豈いは泰誓の文の魏晉

の間の人の偽撰に出づる者に非ずや。【蔡氏(③)「泰誓・武成の一篇の中、盡くは一人の口に出づるに非ざるに似たり」と曰ひ、又た吳氏(④)の「其の書の晚出を疑ふ。或は盡くは當時の本文に非ず」と言ふを引くは、蓋し已に此に見及す。特だ注家の體なるを以て、未だ敢へて其の偽を直言せざるのみ。】

「朕の夢は朕の卜に協ひ、休祥を襲ぬ、商に戎すれば必ず克たん」(⑤)と。君を伐つ大事にして、之れを夢に託すは、其れ誰か之れを信ぜん。殆ど即ち呂氏春秋(⑥)載する夷・齊の言に、「武王夢を揚げて以て衆を説く」と謂ふ者なり。【左傳昭七年(⑦)の、衛の史朝の言に「筮は夢に襲れりとは、武王の用ひし所なり」と曰へば、是れ當時已に此の語有りしなり。】

孟子(⑧)書の「王曰はく、畏るる無かれ。爾を寧んずるなり、百姓に敵するに非ざるなり」と。崩るるが若く角を厥して稽首すを引くに、今之れを改めて「畏るる無き或る罔し、寧ろ敵に非ざるを執れ。百姓棟棟として、厥の角を崩すが若し」と曰ふ。後儒曲げて之れが説を爲すと雖ども、而れども通ずべからず。

①尺地莫非其有也——『孟子』公孫丑上篇。

紂之去武丁未久也、其故家遺俗、流風善政、猶有存者。又有微子・微仲・王子比干・箕子・膠鬲、皆賢人也、相與輔相之、故久而後失之也。尺地莫非其有也、一民莫非其臣也。然而文王猶方百里起、是以難也。

②獨夫受・肆予小子——(泰誓)下篇。

時厥明、王乃大巡六師、明誓衆士。王曰「嗚呼。我西土君子、天有顯道、厥類惟彰。今商王受、狎侮五常、荒怠弗敬。自絶

于天、結怨于民、斷朝涉之脛、剖賢人之心。作威殺戮毒痛四海。崇信姦回、放黜師保、屏棄典刑、囚奴正士、郊社不修、宗廟不享、作奇技淫巧以悅婦人。上帝弗順、祝降時喪。爾其孜孜、奉予一人、恭行天罰。古人有言曰「撫我則后、虐我則讎」。獨夫受、洪惟作威、乃汝世讎。樹德務滋、除惡務本、肆予小子、誕以爾衆士、殄殲乃讎。爾衆士其尚迪果毅、以登乃辟。功多有厚賞、不迪有顯戮。嗚呼。惟我文考、若日月之照臨、光于四方、顯于西土。惟我有周、誕受多方。予克受、非予武、惟朕文考無罪。受克予、非朕文考有罪、惟予小子無良」。

③蔡氏——(牧誓)篇末尾「爾所弗助、其于爾躬有戮(爾の助めざる所、其れ爾の躬に于て戮有らん)の(蔡傳)に次のように見える。

弗助謂不勉於前三者。愚謂此篇嚴肅而温厚、與湯誓語相表裏、眞聖人之言也。泰誓・武成一篇之中、似非盡出一人之口。豈獨此爲全書乎。讀者其味之。

④吳氏——(泰誓)題辭の(蔡傳)所引。なお「吳氏」とは宋の吳棫(才老)『書神傳』を指す。

吳氏曰、湯武皆以兵受命、然湯之辭裕、武之辭迫、湯之數桀也恭、武之數紂也傲、學者不能無憾。疑其書之晚出。或非盡當時之本文也。

⑤朕夢協朕卜——(泰誓)中篇。

「天其以予乂民、朕夢協朕卜、襲于休祥、戎商必克、受有億兆夷人、離心離德、予有亂臣十人、同心同德。雖有周親、不如仁人。天視自我民視、天聽自我民聽。百姓有過、在予一人。」

今朕必往、我武惟揚、侵于之疆、取彼凶殘、我伐用張、于湯有光。勛哉夫子、罔或無畏、寧執非敵。百姓懷懷、若崩厥角。嗚呼。乃一德一心、立定厥功、惟克永世」。

⑥呂氏春秋——『呂氏春秋』季冬紀・誠廉篇。

昔周之將興也、有士二人、處於孤竹、曰伯夷・叔齊。二人相謂曰「吾聞西方有偏伯焉、似將有道者、今吾奚爲處乎此哉。」二子西行如周、至於岐陽、則文王已歿矣。武王即位、觀周德、則王使叔且就膠鬲於次四內、而與之盟曰「加富三等、就官一列。」爲三書同辭、血之以牲、埋一於四內、皆以一歸。又使保召公就微子開於共頭之下、而與之盟曰「世爲長侯、守殷常祀、相奉桑林、宜私孟諸。」爲三書同辭、血之以牲、埋一於共頭之下、皆以一歸。伯夷・叔齊聞之、相視而笑曰「譴、異乎哉。此非吾所謂道也。昔者神農氏之有天下也、時祀盡敬而不祈福也。其於人也、忠信盡治而無求焉。樂正與爲正、樂治與爲治、不以人之壞自成也、不以人之庫自高也。今周見殷之僻亂也、而遽爲之正與治、上謀而行貨、阻丘而保威也。割牲而盟以爲信、因四內與共頭以明行、揚夢以說衆、殺伐以要利、以此紹殷、是以亂易暴也。吾聞古之士、遭乎治世、不避其任、遭乎亂世、不爲苟在。今天下闇、周德衰矣。與其並乎周以漫吾身也、不若避之以潔吾行。」二子北行、至首陽之下而餓焉。人之情莫不有重、莫不有輕。有所重則欲全之、有所輕則以養所重。伯夷・叔齊、此二士者、皆出身棄生以立其意、輕重先定也。

⑦左傳昭七年——『左傳』昭公七年的条。

衛襄公夫人姜氏無子、嬖人嬀始生孟縶。孔成子夢康叔謂己「立

元、余使羈之孫圉與史苟相之」。史朝亦夢康叔謂己「余將命而子苟與孔烝鉏之曾孫圉相元」。史朝見成子、告之夢、夢協。晉韓宣子爲政聘于諸侯之歲、嬀始生子、名之曰元。孟紮之足不良能行。孔成子以《周易》筮之、曰「元尚享衛國、主其社稷」。遇屯註。又曰「余尚立紮、尚克嘉之」。遇屯註之比註。

以示史朝。史朝曰「『元亨』、又何疑焉」。成子曰「非長之謂乎」。對曰「康叔名之、可謂長矣。孟非人也、將不列於宗、不可謂長。且其繇曰『利建侯』。嗣吉、何建。建非嗣也。二卦皆云、子其建之。康叔命之、二卦告之、筮襲於夢、武王所用也、弗從何爲。弱足者居。侯主社稷、臨祭祀、奉民人、事鬼神、從會朝、又焉得居。各以所利、不亦可乎」。故孔成子立靈公。十二月癸亥、葬衛襄公。

⑧孟子——『孟子』盡心下篇。

孟子曰、有人曰「我善爲陳、我善爲戰」、大罪也。國君好仁、天下無敵焉、南面而征北夷怨、東面而征西夷怨、曰「奚爲後我」。武王之伐殷也、革車三百兩、虎賁三千人。王曰「無畏。寧爾也、非敵百姓也」。若崩厥角稽首。征之爲言正也、各欲正己也、焉用戰。

⑩ 百姓有過在予一人

「百姓有過、在予一人」、凡百姓之「不有康食、不虞天性、不迪率典」、皆我一人之責。今我當順民心、以誅無道也。蔡氏謂「民皆有責於我」、似爲紆曲。

「百姓に過ち有らば、予一人に在り」(⑩)、凡そ百姓の「康食する有らず、天性を虞らず、典に迪み率はざる」(②)は、皆な我れ一人の責なり。今我れ當に民心に順ひて、以て無道を誅すべきなり。蔡氏「民は皆な我に責有り」(③)と謂ふは、紆曲爲るに似たり。

① 百姓有過——(秦誓)中篇。

「天其以予乂民、朕夢協朕卜、襲于休祥、戎商必克、受有億兆夷人、離心離德、予有亂臣十人、同心同德。雖有周親、不如仁人。天視自我民視、天聽自我民聽。百姓有過、在予一人。今朕必往。」(蔡傳)武王言天之視聽、皆自乎民。今民皆有責於我、謂我不正商罪、以民心而察天意、則我之伐商、斷必往矣。蓋百姓畏紂之虐、望周之深、而責武王不即拯己於水火也。如湯東面而征西夷怨、南面而征北狄之意。」我武惟揚、侵于之疆、取彼凶殘、我伐用張、于湯有光。勛哉夫子、罔或無畏、寧執非敵。百姓櫟櫟、若崩厥角。嗚呼。乃一德一心、立定厥功、惟克永世」。

② 不有康食——(西伯戡黎)篇。

西伯既戡黎、祖伊恐、奔告于王。曰「天子。天既訖我殷命、格人元龜、罔敢知吉。非先王不相我后人、惟王淫戲用自絕。故天棄我、不有康食、不虞天性、不迪率典。今我民罔弗欲喪、曰『天曷不降威。大命不摯』。今王其如臺」。王曰「嗚呼。我生不有命在天。」祖伊反曰「嗚呼。乃罪多參在上、乃能責命于天。殷之即喪、指乃功、不無戮于爾邦」。

③ 蔡氏——注①參照。

18 王朝歩自周

武成「王朝歩自周、于征伐商」、召誥「王朝歩自周、則至于豊」、畢命「王朝歩自宗周、至于豊」、不敢乘車而步出國門、敬之至也。【馬氏曰「豊文王廟所在」。鄭氏以爲「出廟入廟皆步行」。今按書言「歩自周」、則不但於廟也。雍録以爲「歩行二十五里」、則又太遠。】後之人君驕恣惰佚、於是有輦而行國中、坐而見羣臣、非先王之制矣。【皇帝輦出房、見於漢書叔孫通傳、乃秦儀也。】

呂氏春秋「出則以輿、入則以輦、務以自佚、命之曰招蹙之機」。【枚乘七發本此、作「厥痿之機」。】宋呂大防言「前代人主、在宮禁之中、亦乘輿輦。祖宗皆歩自內庭、出御前殿、此勤身之法也。」「周輝清波雜志」

太祖實録「吳元年、上以諸子年長宜習勤勞、使不驕惰、命內侍製麻屨行勝、每出城稍遠、則馬行其二、步趨其一」。至崇禎帝亦嘗歩禱南郊。嗚呼、皇祖之訓遠矣。

\*1原抄本「輝」字、世界書局本「憚」字に誤る。光緒本が正しい。

\*2原抄本「遠」字無し。

武成①に「王朝に周より歩み、于きて商を征伐す」、召誥②に「王朝に周より歩み、則ち豊に至る」、畢命③に「王朝に宗周より歩み、豊に至る」といひ、敢へて車に乗らずして國門より歩み出づるは、敬の至りなり。【馬氏④曰はく「豊は文王の廟の在る所なり」と。鄭氏⑤以爲へらく「廟を出で廟に入るには皆な步行す」と。今按ずるに書に「周より歩む」と言ふは、則ち但に廟に於けるのみならざるなり。雍録⑥に以爲へらく「歩行二十五里」とは、則ち又た太だ遠し。】後の人君は驕恣にして惰佚し、是に於て輦有りて國中を行き、坐

して羣臣を見るは、先王之制に非ざるなり。【皇帝の輦して房を出づること、漢書叔孫通傳⑦に見ゆれば、乃ち秦の儀なり。】

呂氏春秋⑧「出づるときは則ち輿を以てし、入るときは則ち輦を以てし、務めて以て自ら佚する、之れに命けて招蹙の機と曰ふ」とあり。【枚乘の七發⑨は此れに本づき、「厥痿の機」に作る。】宋の呂大防⑩言ふ「前代の人主は、宮禁の中に在りても、亦た輿輦に乗る。祖宗は皆な内庭より歩み、出でて前殿に御す、此れ身を勤むるの法なり」と。【周輝清波雜志⑪】

太祖實録に「吳の元年、上諸子の年長も宜しく勤勞を習ふべく、驕惰せざらしむるを以て、内侍に命じて麻屨・行勝を製らしめ、毎に城を出でて稍遠くば、則ち馬行は其の二、步趨は其の一なり」とあり。崇禎帝に至りても亦た嘗て歩みて南郊に禱る。嗚呼、皇祖の訓は遠くなりきに。

①武成——(武成)篇。

惟一月壬辰、旁死魄、越翼日癸巳、王朝歩自周、于征伐商。厥四月哉生明、王來自商至于豊。乃偃武修文。歸馬于華山之陽、放牛于桃林之野、示天下弗服。丁未、祀于周廟、邦甸・侯・衛、駿奔走、執豆籩。越三日庚戌、柴望大告武成。既生魄、庶邦冢君、暨百工、受命于周。

②召誥——(召誥)篇。

惟二月既望、越六日乙未、王朝歩自周、則至于豊。惟太保先周公相宅、越若來三月、惟丙午朏、越三日戊申、太保朝至于洛、卜宅。厥既得卜、則經營。越三日庚戌、太保乃以庶殷、攻位于洛汭、越五日甲寅、位成。

③畢命——〈畢命〉篇。

惟十有二年、六月、庚午朔。越三日壬申、王朝步自宗周、至于豐。以成周之衆、命畢公保厘東郊。

④馬氏・鄭氏——兩氏いずれも『尚書注』であるが、もとより現在では逸書である。『史記』魯周公世家「成王七年二月乙未、王朝步自周、至豐、使太保召公先之雒相土。其三月、周公往營成周雒邑、卜居焉、曰吉、遂國之」の〈集解〉に以下のように引用されている。

馬融曰「周、鎬京也。豐、文王廟所在。朝者、舉事上朝、將即土中易都、大事、故告文王、武王廟。」

鄭玄曰「歩、行也、堂下謂之歩。豐、鎬異邑、而言歩者、告武王廟即行、出廟入廟、不以爲遠、爲父恭也。」

⑤雍錄——宋・程大昌『雍錄』「豐」の条。

⑥漢書叔孫通傳——『漢書』酈陸朱劉叔孫傳第十三。

漢七年、長樂宮成、諸侯臣朝十月。儀：先平明、謁者治禮、引以次入殿門、廷中陳車騎成卒衛官、設兵、張旗志。傳曰「趨」。殿下郎中俠陛、陛數百人。功臣列侯諸將軍軍吏以次陳西方、東鄉。文官丞相以下陳東方、西鄉。大行設九賓、臚句傳。於是皇帝輦出房、百官執戟傳警、引諸侯王以下至吏六百石以次奉賀。自諸侯王以下莫不震恐肅敬。至禮畢、盡伏、置法酒。諸侍坐殿上皆伏抑首、以尊卑次起上壽。觴九行、謁者言「罷酒」。御史執法舉不如儀者輒引去。竟朝置酒、無敢譴諱失禮者。於是高帝曰「吾乃今日知爲皇帝之貴也。」拜通爲奉常、賜金五百斤。

⑦呂氏春秋——『呂氏春秋』孟春紀・本生篇。

貴富而不知道、適足以爲患、不如貧賤。貧賤之致物也難、雖欲過之奚由。出則以車、入則以輦、務以自佚、命之曰招蹙之機。肥肉厚酒、務以自彊、命之曰爛腸之食。靡曼皓齒、鄭衛之音、務以自樂、命之曰伐性之斧。三患者、貴富之所致也。故古之人有不肯貴富者矣、由重生故也、非夸以名也、爲其實也。則此論之不可不察也。

⑧枚乘七發——前漢・枚乘の〈七發〉は『文選』卷三十四〈七上〉所収。

故曰縱耳目之欲、恣支體之安者、傷血脉之和。且夫出輿入輦、命曰蹙瘵之機。

ちなみに〈李善注〉は以下の通り。

呂氏春秋曰「出則以車、入則以輦、務以自佚、命曰怡蹙之機」。高誘曰「怡、至也。蹙機、門內之位也。乘輦于宮中、游翔至於蹙機、故曰務以佚也」。枚乘引怡蹙而爲蹙瘵、未詳。乘之謬爲好奇而改之。」

⑨宋呂大防——『宋史』卷三百四十列傳第九十九に呂大防が宋朝の家法を述べた言葉の中に見える。

大防因推廣祖宗家法以進、曰、自三代以後、唯本朝百二十年中外無事、蓋由祖宗所立家法最善、臣請舉其略。自古人主事母后、朝見有時、如漢武帝五日一朝長樂宮。祖宗以來事母后、皆朝夕見、此事親之法也。前代大長公主用臣妾之禮。本朝必先致恭、仁宗以姝事姑之禮見獻穆大長公主、此事長之法也。前代宮闈多不肅、宮人或與廷臣相見、唐入閣圖有昭容位。本朝宮禁嚴密、內外整肅、此治內之法也。前代外戚多預政事、常致敗亂。本

朝母后之族皆不預、此待外戚之法也。前代宮室多尚華侈。本朝宮殿止用赤白、此尚儉之法也。前代人君雖在宮禁、出輿入輦。祖宗皆步自內庭、出御後殿。豈乏人力哉、亦欲涉歷廣庭、稍冒寒暑、此勤身之法也。前代人主、在禁中冠服苟簡。祖宗以來、燕居必以禮。竊聞陛下昨郊禮畢、具禮謝太皇太后、此尚禮之法也。前代多深於用刑、大者誅戮、小者遠竄。惟本朝用法最輕、臣下有罪、止於罷黜、此寬仁之法也。至於虛已納諫、不好畋獵、不尚翫好、不用玉器、不貴異味、此皆祖宗家法、所以致太平者。陛下不須遠法前代、但盡行家法、足以爲天下。

哲宗甚然之。

⑩周輝清波雜志——宋・周輝『清波雜志』卷一「祖宗家法」。

19 大王王季

中庸言「武王末受命、周公成文・武之德、追王大王・王季」、大傳言「武王於牧之野、既事而退、遂率天下諸侯、執豆籩、俊奔走、追王大王亶父・王季歷・文王昌」、二說不同。今按武成言「丁未、祀于周廟」、而其告「庶邦冢君」、稱「大王・王季」、金縢之冊祝曰「若爾三王」、是武王之時、已追王大王・王季、而中庸之言未爲得也。蘇之詩、上稱「古公亶父」、下稱「文王」、是古公未上尊號之先、文已稱王、而大傳之言未爲得也。

仁山金氏曰「武王舉兵之日、已稱王矣。故類於上帝、行天子之禮、而稱『有道曾孫周王發』、必非史臣追書之辭。後之儒者、乃嫌聖人之事而文之、非也」。然文王之王與大王・王季之王、自不同時。而

「追王大王・王季」、必不在周公踐阼之後。【疑武王未克商、先已追尊文王。史記伯夷傳「西伯卒、武王載木主、號爲文王、東伐紂」。】

\*原抄本「祚」字に作る。

中庸①に「武王末に命を受け、周公文・武の徳を成し、大王・王季を追王す」と言ひ、大傳②に「武王牧の野に於て、事を既りて退き、遂に天下の諸侯を率ゐ、豆籩を執り、俊く奔走し、大王亶父・王季歷・文王昌を追王す」と言ひて、二説同じからず。今按ずるに武成③に「丁未、周廟に祀る」と言ひ、而して其の「庶邦冢君」に告ぐるに、「大王・王季」と稱し、金縢の冊祝④に「若し爾三王」と曰ふは、是れ武王の時、已に大王・王季を追王したれば、而ち中庸の言は未だ得たりと爲さざるなり。蘇の詩⑤に、上に「古公亶父」と稱し、下に「文王」と稱するは、是れ古公は未だ尊號を上らざるの先に、文已に王を稱すれば、而ち大傳の言は未だ得たりと爲さざるなり。

仁山金氏⑥曰はく「武王は舉兵の日に、已に王を稱したり。故に上帝に類し、天子の禮を行ひ、而して『有道の曾孫たる周王發』⑦と稱するは、必ずや史臣追書の辭に非ざるべし。後の儒者、乃て聖人の事なるやを嫌ひて之れを文るは、非なり」と。然らば文王の王と大王・王季の王とは、自より時を同じくせずして、「大王・王季を追王す」るは、必ずや周公踐阼の後に在らざるべし。【疑ふらくは武王の未だ商に克たずして、先づ已に文王を追尊せるなり。史記伯夷傳⑧に「西伯卒し、武王木主を載せ、號して文王と爲し、東して紂を伐つ」とあり。】

①中庸——『禮記』中庸篇。

子曰「無憂者其惟文王乎。以王季爲父、以武王爲子、父作之、子述之。武王纘大王·王季·文王之緒、壹戎衣而有天下、身不失天下之顯名。尊爲天子、富有四海之內。宗廟饗之、子孫保之。武王末受命、周公成文、武之德、追王大王·王季、上祀先公以天子之禮。斯禮也、達乎諸侯·大夫及士·庶人。父爲大夫、子爲士、葬以大夫、祭以士。父爲士、子爲大夫、葬以士、祭以大夫。期之喪、達乎大夫。三年之喪、達乎天子。父母之喪、無貴賤、一也。」

②大傳——『禮記』大傳篇。

牧之野、武王之大事也。既事而退、柴於上帝、祈於社、設奠於牧室。遂率天下諸侯、執豆籩、逡奔走。追王大王·王季·文王·王昌。不以卑臨尊也。上治祖禰、尊尊也。下治子孫、親親也。旁治昆弟、合族以食、序以昭繆、別之以禮義、人道竭矣。

③武成——（武成）篇。

丁未、祀于周廟、邦甸·侯·衛·駿奔走、執豆籩。越三日庚戌、柴望大告武成。既生魄、庶邦冢君、暨百工、受命于周。王若曰「嗚呼。群后、惟先王建邦啓土。公劉克篤前烈、至于大王、肇基王跡、王季其勤王家。我文考文王、克成厥勳、誕膺天命、以撫方夏。大邦畏其力、小邦懷其德。惟九年、大統未集。予小子其承厥志。底商之罪、告于皇天後土、所過名山大川。曰『惟有道曾孫周王發、將有大正于商。』今商王受無道……」

④金縢之冊祝——（金縢）篇。

既克商二年、王有疾、弗豫。二公曰「我其爲王穆卜」。周公

⑤緜之詩——『毛詩』大雅·緜篇。

曰「未可以戚我先王」。公乃自以爲功、爲三壇同禱。爲壇於南方、北面周公立焉、植璧秉珪、乃告太王·王季·文王。史乃冊祝曰「惟爾元孫某、遵厲虐疾、若爾三王、是有丕子之責于天、以且代某之身。予仁若考、能多材多藝、能事鬼神、乃元孫不若且多材多藝、不能事鬼神。乃命于帝庭、敷佑四方、用能定爾子孫于下地、四方之民、罔不祗畏。嗚呼。無墜天之降寶命、我先王亦永有依歸。今我即命于元龜、爾之許我、我其以璧與珪、歸俟爾命、爾不許我、我乃屏璧與珪」。乃卜三龜、一習吉。啓嚌見書、乃并是吉。公曰「體、王其罔害、予小子新命于三王、惟永終是圖。茲攸俟、能念予一人」。公歸、乃納冊于金縢之匱中。王翼日乃瘳。武王既喪、管叔及其群弟乃流言於國、曰「公將不利於孺子」。周公乃告二公曰「我之弗辟、我無以告我先王」。周公居東二年、則罪人斯得。于后、公乃爲詩以貽王、名之曰「鶉」、王亦未敢誚公。

綿綿瓜瓞、民之初生、自土沮漆、古公亶父、陶復陶穴、未有家室、爰及姜女、聿來胥宇、周原膺膺、董茶如飴、爰始爰謀、爰契我龜、曰止日時、築室于茲、迺慰迺止、迺左迺右、迺疆迺理、迺宣迺飲、自西徂東、周爰執事、乃召司空、乃召司徒、俾立室家、其繩則直、縮版以載、作廟翼翼、



掠之隕隕、度之薨薨、築之登登、削屢馮馮、

百堵皆興、鼙鼓弗勝、

迺立皋門、皋門有伉、迺立應門、應門將將、

迺立冢土、戎醜攸行、

肆不殄厥愠、亦不隕厥問、柞棘拔矣、行道兌矣、

混夷駿矣、維其喙矣、

虞芮質厥成、文王厥厥生、

予曰有疏附、予曰有先後、予曰有奔奏、予曰有禦侮、

⑥仁山金氏——宋·金履祥『資治通鑑前編』卷四·卷六。

⑦有道曾孫周王發——注③(武成)篇參照。

⑧史記伯夷傳——『史記』伯夷列傳。

伯夷·叔齊、孤竹君之二子也。父欲立叔齊、及父卒、叔齊讓

伯夷。伯夷曰「父命也。」遂逃去。叔齊亦不肯立而逃之。國

人立其中子。於是伯夷·叔齊聞西伯昌善養老、盡往歸焉。及

至、西伯卒、武王載木主、號爲文王、東伐紂。伯夷·叔齊叩

馬而諫曰「父死不葬、爰及干戈、可謂孝乎。以臣弑君、可謂

仁乎。」左右欲兵之。太公曰「此義人也。」扶而去之。

〔補注〕本条は「周書」諸篇を同時資料とする立場からの議論である。

20 彝倫

「彝倫」者天地人之常道、如下所謂「五行・五事・八政・五紀・皇極・三德・稽疑・庶徵・五福・六極」、皆在其中。不止孟子之言人倫而已。「能盡其性」、以至「能盡人之性、盡物之性、則可以贊天

地之化育」、而彝倫敘矣。

\*1光緒本「叙」字に、世界書局本「叙」字に作る。

「彝倫」(①)は天地人の常道にして、下に謂はゆる「五行・五事・八政・五紀・皇極・三德・稽疑・庶徵・五福・六極」の如きは、皆な其の中に在り。孟子(②)の人倫を言ふのみに止まらず。「能く其の性を盡くす」より、以て「能く人の性を盡くし、物の性を盡くさば、則ち以て天地の化育を贊すべし」(③)に至りて、彝倫は敘せられたり。

①彝倫——(洪範)篇に見える言葉。

惟十有三祀、王訪于箕子。

王乃言曰「嗚呼、箕子。惟天陰騭下民、相協厥居、我不知其彝倫攸敘」。(言我不知天所以定民之常道理次敘。問何由。)

箕子乃言曰「我聞在昔、鯀陞洪水、汨陳其五行、帝乃震怒、不畀洪範九疇、彝倫攸斁。鯀則殛死、禹乃嗣興、天乃錫禹洪範九疇、彝倫攸敘」。

初一日五行、次二日敬用五事、次三日農用八政、次四日協用五紀、次五日建用皇極、次六日又用三德、次七日明用稽疑、次八日念用庶徵、次九日向用五福、威用六極。

一・五行。一曰水、二曰火、三曰木、四曰金、五曰土。水曰潤下、火曰炎上、木曰曲直、金曰從革、土爰稼穡。潤下作鹹、炎上作苦、曲直作酸、從革作辛、稼穡作甘。

二・五事。一曰貌、二曰言、三曰視、四曰聽、五曰思。貌曰恭、言曰從、視曰明、聽曰聰、思曰睿。恭作肅、從作乂、明

恭、言曰從、視曰明、聽曰聰、思曰睿。恭作肅、從作乂、明

作哲、聽作謀、睿作聖。

三・八政。一日食、二日貨、三日祀、四日司空、五日司徒、六日司寇、七日賓、八日師。

四・五紀。一日歲、二日月、三日日、四日星辰、五日歷數。

五・皇極。皇建其有極、敘時五福、用敷錫厥庶民。惟時厥庶民于汝極、錫汝保極。

②孟子——『孟子』滕文上篇。

當堯之時、天下猶未平、洪水橫流、泛濫於天下。草木暢茂、禽獸繁殖。五穀不登、禽獸逼人。獸蹄鳥跡之道、交於中國。堯獨憂之、舉舜而敷治焉。舜使益掌火。益烈山澤而焚之、禽獸逃匿。禹疏九河、滄濟・潔而注諸海。決汝・漢、排淮・泗、而注之江、然後中國可得而食也。當是時也、禹八年於外、三過其門而不入、雖欲耕、得乎。后稷教民稼穡、樹藝五穀、五穀熟而民人育。人之有道也、飽食暖衣、逸居而無教、則近於禽獸。聖人有憂之、使契爲司徒、教以人倫。父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信。放助曰「勞之來之、匡之直之、輔之翼之、使自得之。又從而振德之」。聖人之憂民如此、而暇耕乎。堯以不得舜爲己憂。舜以不得禹・皋陶爲己憂。夫以百畝之不易爲己憂者、農夫也。分人以財謂之惠、教人以善謂之忠、爲天下得人者謂之仁。是故以天下與人易、爲天下得人難。孔子曰「大哉、堯之爲君。惟天爲大、惟堯則之。蕩蕩乎民無能名焉。君哉舜也。巍巍乎有天下而不與焉」。堯舜之治天下、豈無所用其心哉。亦不用於耕耳。

③能盡其性……『禮記』中庸篇。

自誠明、謂之性。自明誠、謂之教。誠則明矣、明則誠矣。唯

天下至誠爲能盡其性。能盡其性、則能盡人之性。能盡人之性、則能盡物之性。能盡物之性、則可以贊天地之化育。可以贊天地之化育、則可以與天地參矣。

21 龜從筮逆(1)

古人求神之道不止一端。故卜筮並用、而終以龜爲主。周禮筮人言「凡國之大事、先筮而後卜」、注「當用卜者先筮之、即事有漸也。於筮之凶、則止不卜」。然而洪範有「龜從筮逆」者、則知古人固不拘乎此也。大卜「掌三兆之法。其經兆之體、皆百有二十、其頌皆千有二百」、故傳曰「筮短龜長」。【左傳「晉獻公將以驪姬爲夫人、卜之不吉、筮之吉。卜人曰、筮短龜長、不如從長」、注「物生而後有象、象而後有滋、滋而後有數。龜象筮數、故象長數短」。曲禮正義曰「凡物初生則有象、去初既近、且包羅萬形、故爲長。數是終末、去初既遠、推尋事數、始能求象、故以爲短也。」】自漢以下、文帝代來、猶有大橫之兆。藝文志有「龜書五十二卷、夏龜二十六卷、南龜書二十八卷、巨龜三十六卷、雜龜十六卷」、而後則無聞。唐之李華遂有廢龜之論矣。【舊唐書】

\*集積本「三」字に誤る。

古人の神を求むるの道は一端に止まらず。故に卜・筮をば並用するも、而も終には龜を以て主と爲す。周禮筮人(2)に「凡そ國の大事は、筮を先にして卜を後にす」と言ひ、注に「當に卜を用ふべき者に先づ之れを筮するは、事に即くに漸有ればなり。筮の凶なるに於ては、則ち止めて卜せず」とあり。然も洪範に「龜は從ひ筮は逆ふ」者有れば、則ち古人は固より此に拘らざるを知るなり。

大卜(③)は「三兆の法を掌る。其の經兆の體は、皆な百有二十、其の頌は皆な千有二百」なり、故に傳(④)に曰はく、「筮は短く龜は長し」と。【左傳に「晉の獻公將に驪姫を以て夫人と爲さんとし、之れを卜するに不吉、之れを筮するに吉なり。卜人曰はく、筮は短く龜は長し、長に従ふに如かず」とあり、注に「物生じて而る後に象有り、象ありて而る後に滋る有り、滋りて而る後に數有り。龜は象、筮は數なり、故に象は長く數は短し」といふ。曲禮正義(⑤)に曰はく「凡そ物の初めて生ずるときは則ち象有りて、初を去ること既に近く、且つ萬形を包羅す、故に長と爲す。數は是れ終末、初を去ること既に遠く、事數を推尋して、始めて能く象を求む、故に以て短と爲すなり」と。】漢より以下、文帝の代より來、猶ほ大横の兆有り(⑥)。藝文志(⑦)に「龜書五十二卷、夏龜二十六卷、南龜書二十八卷、巨龜三十六卷、雜龜十六卷」有れども、而も後には則ち聞く無し。唐の李華(⑧)に遂に廢龜の論有るなり。【舊唐書。】

①龜從筮逆——〔洪範〕篇。

汝則有大疑、謀及乃心、謀及卿士、謀及庶人、謀及卜筮。汝則從、龜從、筮從、卿士從、庶民從、是之謂大同(汝則ち從し、龜從ひ、筮從ひ、卿士從ひ、庶民從ふ、是れを之れ大同と謂ふ)。

②周禮筮人——『周禮』春官・筮人。

筮人。掌三易以辨九筮之名、一曰連山、二曰歸藏、三曰周易。九筮之名、一曰巫更、二曰巫咸、三曰巫式、四曰巫目、五曰巫易、六曰巫比、七曰巫祠、八曰巫參、九曰巫環。以辨吉凶。凡國之大事、先筮而後卜。【鄭注當用卜者、先筮之、即事有漸也。於筮之凶、則止不卜。】上春、相筮。凡國事、共筮。

③大卜——『周禮』春官・大卜篇。

大卜。掌三兆之灋、一曰玉兆、二曰瓦兆、三曰原兆。〔兆者灼龜發於火、其形可占者。其象似玉瓦原之聲鏗。是用名之焉。上古以來作其法、可用者有三原。原田也。杜子春云、玉兆帝顛頊之兆、瓦兆帝堯之兆、原兆有周之兆。〕其經兆之體、皆百有二十、其頌皆千有二百。

④傳曰——『左傳』僖公四年の条。

初、晉獻公欲以驪姫爲夫人、卜之、不吉。筮之、吉。公曰「從筮」。卜人曰「筮短龜長、不如從長」。〔杜注物生而後有象、象而後有滋、滋而後有數。龜象筮數、故象長數短。〕且其繇曰「專之渝、攘公之瑜。一薰一蕕、十年尚猶有臭」。必不可。弗聽、立之。生奚齊、其娣生卓子。

⑤曲禮正義——『禮記』曲禮上篇「卜筮不相襲」の『正義』。

卜不吉則又筮、筮不吉則又卜、是瀆龜筮也。晉獻公卜取驪姫不吉。公曰、筮之、是也。所以僖四年左傳云「筮短龜長、不如從長」者、時晉獻公卜娶驪姫不吉、更欲筮之。故太史史蘇欲止公之意、託云「筮短龜長」耳、實無優劣也。若杜預・鄭玄因「筮短龜長」之言以爲實有長短。故杜預注傳云「物生而後有象、象而後有滋、滋而後有數。龜象筮數、故象長數短」是也。象所以長者、以物初生則有象。去初既近、且包羅萬形、故爲長。數短者、數是終末、去初既遠、推尋事數、始能求象、故以爲短也。

⑥大横之兆——『漢書』文帝紀に見える。「代王」とは後の文帝。

代王報太后、計猶豫未定。卜之、兆得大横。占曰「大横庚庚、余爲天王、夏啓以光。」代王曰「寡人固已爲王、又何王乎」。

卜人曰「所謂天王者、乃天子也」。於是代王乃遣太后弟薄昭見太尉勃、勃等具言所以迎立王者。

⑦藝文志——『漢書』藝文志・數述略「著龜」の條。

龜書五十二卷。

夏龜二十六卷。

南龜書二十八卷。

巨龜三十六卷。

雜龜十六卷。

著書二十八卷。

周易三十八卷。

周易明堂二十六卷。

⑧唐之李華——『舊唐書』文苑李華傳。

李華字遐叔、趙郡人。開元二十三年進士擢第。天寶中、登朝爲監察御史。累轉侍御史、禮部、吏部二員外郎。華善屬文、與蘭陵蕭穎士友善。華進士時、著含元殿賦萬餘言、穎士見而賞之、曰「景福之上、靈光之下。」華文體溫麗、少宏傑之氣、穎士詞鋒俊發、華自以所業過之、疑其誣詞。乃爲祭古戰場文、熏汗之如故物、置於佛書之閣。華與穎士因閱佛書得之、華謂之曰「此文何如。」穎士曰「可矣。」華曰「當代秉筆者、誰及於此。」穎士曰「君稍精思、便可及此。」華愕然。華著論言龜卜可廢、通人當其言。

22 周公居東

主少國疑、周公又出居於外、而上下安寧、無腹心之患者、二公之

力也。武王之誓衆曰「予有亂臣十人、同心同德」、於此見之矣。荀子曰「二公仁智且不蔽、故能持周公、而名利福祿、與周公齊」。

\* 1原抄本「寧安」に作る。

\* 2原拠「知」字に作る。

主は少く國に疑あり、周公は又た出でて外に居りて、而も上下安寧、腹心の患無きは、二公①の力なり。武王②の衆に誓ふに「予に亂臣十人有り、同心同德」と曰ふこと、此に於て之れを見るべし。荀子③曰はく「二公は仁智にして且つ蔽はれず、故に能く周公を持して、名利福祿は周公と齊し」と。

①二公——後文に明らかなように、太公望呂尚と召公奭を指す。

②武王之誓衆——「泰誓」中篇。

「天其以予乂民、朕夢協朕卜、襲于休祥、戎商必克、受有億兆夷人、離心離德、予有亂臣十人、同心同德。雖有周親、不如仁人。天視自我民視、天聽自我民聽。百姓有過、在予一人。今朕必往。」

③荀子——『荀子』解蔽篇。

昔人臣之蔽者、唐鞅・奚齊是也。唐鞅蔽於欲權而逐載子、奚齊蔽於欲國而罪申生。唐鞅戮於宋、奚齊戮於晉。逐賢相而罪孝兄、身爲刑戮、然而不知、此蔽塞之禍也。故以貪鄙・背叛・爭權而不危辱滅亡者、自古及今、未嘗有之也。鮑叔・甯戚・隰朋仁知且不蔽、故能持管仲而名利福祿與管仲齊。召公・呂望仁知且不蔽、故能持周公、而名利福祿與周公齊。傳曰「知賢之爲明、輔賢之謂能、勉之彊之、其福必長。」此之謂也。此

不敵之福也。

23 微子之命

微子之於周、蓋受國而不受爵。受國以存先王之祀、不受爵以示不爲臣之節。故終身稱微子也。【孔氏書傳曰「微畿內國名、子爵也。」】  
微子卒、立其弟衍、是爲微仲。衍之繼其兄、繼宋非繼微也。而稱「微仲」者何。猶微子之心也。至於衍之子稽則遠矣。於是始稱宋公。嗚呼、吾於洪範之書言「十有三祀」、微子之命以其舊爵名篇、而知武王・周公之仁不奪人之所守也。後之經生不知此義、而抱器之臣倒戈之士接迹於天下矣。

「微子」の周に於けるや、蓋し國を受くれども爵を受けず。國を受けて以て先王之祀を存し、爵を受けずして以て臣爲らざるの節を示す。故に終身「微子」と稱するなり。【孔氏の書傳(①)に曰はく「微は畿内の國の名、子は爵なり」と。】  
微子卒して、其の弟衍を立つ、是れ微仲爲り(②)。衍の其の兄を繼ぐは、宋を繼ぐにて微を繼ぐに非ざるなり。而るに「微仲」と稱するは何ぞ。猶ほ微子の心のごとくすればなり。衍の子稽に至りては則ち遠し。是に於て始めて宋公と稱す。嗚呼、吾れ洪範の書(③)に「十有三祀」と言ひ、微子之命(④)に其の舊爵を以て篇に名づくるに於て、而ち武王・周公の仁人の守る所を奪はざるを知るなり。後の經生は此の義を知らず、而して器を抱くの臣(⑤)、戈を倒にするの士(⑥)、天下に迹を接けたり。

① 孔氏書傳——〈微子〉篇題の〈孔安國傳〉に「微、圻内國名、子爵。爲紂卿士、去無道」とある。

② 微子卒——『史記』宋微子世家。

微子開卒、立其弟衍、是爲微仲。微仲卒、子宋公稽立。

【集解禮記曰「微子舍其孫臚而立衍也」。鄭玄曰「微子適子

死、立其弟衍、殷禮也」。

【索隱按家語、微子弟仲思名衍、一名泄、嗣微子爲宋公。雖

遷爵易位、而班級不過其故、故以舊官爲稱。故二微雖爲宋公、猶稱微、至于稽乃稱宋公也。

③ 洪範之書——〈洪範〉篇。

惟十有三祀、王訪于箕子。〔商曰祀。箕子稱祀、不忘本。此年四月歸宗周。先告武成、次問天道。〕王乃言曰「嗚呼、箕子。惟天

陰騭下民、相協厥居、我不知其彝倫攸斂」。箕子乃言曰「我

聞在昔、鯀陟洪水、汨陳其五行、帝乃震怒、不畀洪範九疇、

彝倫攸斂。

④ 微子之命——〈微子之命〉篇題の〈孔安國傳〉に「稱其本爵以名篇」とある。

篇」とある。

⑤ 抱器之臣——『史記』周本紀。

居二年、聞紂昏亂暴虐滋甚、殺王子比干、囚箕子。太師疵、少師彊抱其樂器而奔周。

少師彊抱其樂器而奔周。

⑥ 倒戈之士——〈武成〉篇。「倒戈」とは矛先を変えること。前に

いる兵士が戈の向きを変え、後ろにいる見方を攻め、その結果

敗走してしまふこと。

甲子昧爽、受率其旅若林、會于牧野。罔有敵于我師、前徒倒

戈、攻于後以北。血流漂杵。一戎衣、天下大定。(甲子の昧爽、

受其の旅を率ゐること林の若く、牧野に會す。我が師に敵する有る罔く、前徒は戈をに倒し、後を攻めて以て北ぐ。血流れて杵を漂はす。一たび戎衣して、天下大いに定まる。」

24 酒誥

酒爲「天之降命」、亦爲「天之降威」。紂以「酗酒」而亡、文王以「不腆于酒」而興。興亡之幾、其原皆在于酒、則所以保天命而畏天威者、後人不可不謹矣。

酒は「天の降す命」爲り、亦た「天の降す威」(①)爲り。紂は「酒に酗ける」を以てして亡び(②)、文王は「酒に腆からざる」を以てして興る(③)。興亡の幾、其の原は皆な酒に在れば、則ち天命を保ちて天威を畏るる所以の者、後人謹しまざるべからず。

①天之降命・天之降威——〈酒誥〉篇。

王若曰、明大于妹邦。乃穆考文王、肇國在西土、厥誥毖庶邦庶士、越少正、御事、朝夕曰、祀茲酒。惟天降命肇我民、惟元祀。天降威我民、用大亂喪德、亦罔非酒惟行(惟れ天の命を降して我が民を肇めしは、惟れ元祀。天の威を我が民に降し、用て大いに亂れ徳を喪ふも、亦た酒を惟れ行なふに非ざるは罔し)。越小大邦用喪、亦罔非酒惟辜。文王誥教小子、有正有事、無彝酒。越庶國飲、惟祀、德將無醉。

②紂以酗酒而亡——〈無逸〉篇。

周公曰、嗚呼。繼自今嗣王、則其無淫于觀于逸于游・田、以

萬民惟正之供。無皇曰、今日耽樂。乃非民攸訓、非天攸若、時人丕則有愆。無若殷王受之迷亂酗于酒德哉(殷王受の迷亂し、酒に酗ふを徳とするが若きこと無からんかな)。「以酒爲凶謂之酗。言紂心迷政亂、以酗酒爲徳、戒嗣王無知之。」

③文王——〈酒誥〉篇。

王曰「封。我西土耒耜邦君・御事・小子、尚克用文王教、不腆于酒。故我至于今、克受殷之命」(封よ。我れは西土に徂るの邦君と御事と小子とを耒くるに、克く文王の教を用ふるに尚く、酒に腆からず。故に我れは今にり至りて、克く殷の命を受く)。「我文王在西土、輔訓往日國君及御治事者・下民子孫。皆庶幾能用上教、不厚於酒。言不常飲。以不厚於酒、故我周家至于今能受殷王之命。」

25 召誥

古者吉行日五十里。故召公營洛、「乙未、自周」、「戊申、朝至于洛」、凡十有四日。師行日三十里。故武王伐紂、「癸巳、自周」、「戊午、師渡孟津」、凡二十有五。漢書以爲「三十一日」、誤。

古者吉行は日に五十里なり。故に召公の洛を營むや(①)、「乙未、周より」し、「戊申、朝、洛に至る」、凡て十有四日なり。師行は日に三十里なり。故に武王の紂を伐つや、「癸巳、周より」(②)し、「戊午、師孟津を渡る」(③)、凡て二十有五日なり。漢書(④)の以て「三十一日」と爲すは、誤りなり。

①召公營洛——〈召誥〉篇。

惟二月既望、越六日乙未、王朝步自周、則至于豐。惟太保先周公相宅、越若來三月、惟丙午朏、越三日戊申、太保朝至于洛、卜宅。厥既得卜、則經營。越三日庚戌、太保乃以庶殷、攻位于洛汭、越五日甲寅、位成。

②癸巳自周——《武成》篇。

惟一月壬辰、旁死魄、越翼日癸巳、王朝步自周、于征伐商。厥四月哉生明、王來自商至于豐。乃偃武修文。歸馬于華山之陽、放牛于桃林之野、示天下弗服。丁未、祀于周廟、邦甸侯衛、駿奔走、執豆籩。越三日庚戌、柴望大告武成。既生魄、庶邦冢君、暨百工、受命于周。

③戊午師渡孟津——《秦誓》序。

惟十有一年、武王伐殷。一月戊午、師渡孟津。〔十三年正月二十八日。更與諸侯期而共伐紂。〕作秦誓三篇。

④漢書——『漢書』律曆志第一下。

癸巳武王始發、丙午還師、戊午度于孟津。孟津去周九百里、師行三十里、故三十一日而度。

〔補注〕参考までに「干支表」を掲げる。「乙未32」より「戊申45」より凡て14日、「癸巳30」より「戊午55」まで凡て26日となる。

10 癸酉	9 壬申	8 辛未	7 庚午	6 己巳	5 戊辰	4 丁卯	3 丙寅	2 乙丑	1 甲子
20 癸未	19 壬午	18 辛巳	17 庚辰	16 己卯	15 戊寅	14 丁丑	13 丙子	12 乙亥	11 甲戌
30 癸巳	29 壬辰	28 辛卯	27 庚寅	26 己丑	25 戊子	24 丁亥	23 丙戌	22 乙酉	21 甲申
40 癸卯	39 壬寅	38 辛丑	37 庚子	36 己亥	35 戊戌	34 丁酉	33 丙申	32 乙未	31 甲午
50 癸丑	49 壬子	48 辛亥	47 庚戌	46 己酉	45 戊申	44 丁未	43 丙午	42 乙巳	41 甲辰
60 癸亥	59 壬戌	58 辛酉	57 庚申	56 己未	55 戊午	54 丁巳	53 丙辰	52 乙卯	51 甲寅

26 元子

微子之命以微子爲殷王「元子」、召誥則又以紂爲「元子」、曰「皇天上帝改厥元子、茲大國殷之命」、又曰「有王雖小、元子哉」。人君謂之天子、故「仁人之事天如事親」。

微子之命(①)は微子を以て殷王の「元子」と爲し(②)、召誥(③)は則ち又た紂を以て「元子」と爲し、「皇天上帝、厥の元子、茲の大國殷の命を改む」と曰ひ、又た「有王小なりと雖ども、元子なるかな」と曰ふ。人君之れを天子と謂ふ、故に「仁人の天に事ふること親に事ふるが如し」(④)。

①微子之命——〈微子之命〉篇。

王若曰、猷。殷王元子。〔微子、帝乙元子、故順道本而稱之。〕  
惟稽古、崇德象賢。統承先王、修其禮物。

○元子——ちなみに『左傳』哀公九年の条に見える魯の陽虎も、以下のように述べている。

晉趙鞅卜救鄭、遇水適火、占諸史趙・史墨・史龜。史龜曰「……」。史墨曰「……」。史趙曰「……」。陽虎以周易筮之、遇泰之需。曰「宋方吉、不可與也。微子啓帝乙之元子也。宋鄭甥舅也。社祿也。若帝乙之元子歸妹而有吉祿、我安得吉焉」。乃止。

○召誥——〈召誥〉篇。

曰、拜手稽首、旅王若公。誥告庶殷、越自乃御事。嗚呼。皇天上帝、改厥元子茲大國殷之命。〔歎皇天、改其天子、此大國殷之命。言紂雖爲天所大子、無道猶改之、言不可不慎。〕惟王受命、無疆惟休、亦無疆惟恤。

……  
嗚呼。有王雖小、元子哉。其不能誠于小民、今休。

③仁人之事天如事親——『禮記』哀公問篇。

孔子蹴然辟席而對曰「仁人不過乎物、孝子不過乎物。是故仁人之事親也如事天、事天如事親。是故孝子成身。」〔仁人は物を過らず、孝子は物を過らず。是の故に仁人の親に事ふるや天に事ふるが如く、天に事ふること親に事ふるが如し。是の故に孝子は身を成す。〕